

# 社会意識の測定

園 直 樹

The Measurement of Social Consciousness

NAOKI SONO

## 梗 概

- I 序, 問題の提出と仮説
- II 方法 (その一) 方向について
- III 方法 (その二) 距り 均衡と破壊
- IV 潜在構造 (社会意識測定のための)  
附録, 接近えの試み  
附録 異邦人について

## 梗 概

西田幾多郎博士は、「善の研究」で次のように述べている。「行為というのは、外面から見れば、肉体の運動であるが単に水が流れる石が落ちるといふ様な物的運動とは異なって居る。一種の意識を具えた目的のある運動である」と。〔さて行為と行動の相異について、例えば橋本真氏の、「社会的行為に関する考察」(同志社大学人文第四輯)に譲り、筆者には、行為と行動の違いは、重大な事ではない。何故ならどちらも意識を具へた目的のある運動である。以下、行動という言葉で述べる〕。〔又、橋本氏は、意識と社会意識の違いも述べられるが、どちらも意識ということに變りはないので、以下文中で意識も社会意識もその文章の状況に応じて適当に述べることにする〕。

さてズナニエツキイは、行動の対象として価値という概念を考えたが、タマスは、価値に対立する個人の意識過程を「態度」(Attitude)と呼んだ。態度は「社会生活に於て個人の現実の又は、可能な行動を規定する個人意識のプロセス」である。(W. I. Thomas and F. Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America 1918* Vol. 1 p. 21) 態度は価値をもって代表される社会と個人とを結びつける概念である。次にタマスは、態度と価値の両者の動的關係を示すものとして状況の規定を使用した。これは、与えられた事実に対する個人の判断及び決心である。状況の規定は、行動を規定するものは、与えられた客觀的事実ではなくして、個人がそれを如何に解するかという主觀的過程であるということを認識したところから生れた概念である。If men define situations as real, they are real in consequence とタ

マスは書いた。この言葉と西田博士の言葉は同義語であると解せられる。

タマスによれば社会学の目的は「行動について記録しうる一般づけを獲得すること」である。行動には、「合理的なもの」と「見たところ不合理なもの seemingly irrationalities」とがある。或いは、制度的手段に依拠する限り「合法的、順応的な行動」と「逸脱的な行動」

(Deviant Behavior) とがある。そして一切の行動は、意識を具えている。例えば、自殺なる行動には、自殺したい—自殺するという意識がある。

さて文化の概念は、後述することとし、「文化目標」を肯定する意識は、権威を認める意識であり、権威を否定する意識は自由に憧れる意識である。例えば労働を肯定する意識は、権威の意識である。〔「労働は社会生活の基盤である」〕。「権威は、実は社会は、文化の基盤である」〕。それとは逆に「社会保障を設定しようとする人間性と民主政治を信頼しない者は、ノラクラ者の国 a nation of loafers」へ行きたいと思う意識をもつ。この意識は「一切の拘束の完全な欠除」即ち自由の意識である。吾々のうち、或る者は、権威の意識が、或る者は、自由の意識が、右の二つの意識の比較的に強い様である。そして権威意識の強い者は、労働や一夫一婦制の結婚に憧れたり、誇りが強くて、恥辱を蒙ったと思う場合、当面する人物を毆打する事も見出される。自由意識の強い者は、川に遊曳する家鴨をうらやましく思ったり、放浪が好きな様である。

さて例えばパチンコ店に於て、玉の買い方、並びに玉の使用の仕方は、人さまごまである。それは何故であるか、行動様式の違いは、意識の違いに由来する。「何処に意識(心理的生産)の存在的基础が置かれているか」

(Where is the existential basis of mental productions located?; マートン後述の本211頁)。それは各個人の頭の中である。しかし頭脳の解剖や、脳波のグラフに関する考察は筆者の分野ではない。それで意識(原因)→行動(結果)という西田氏やタマスの見解より、「見える行動から見えない意識を発見すること」をやりたい。この考えは、例えばマルクスが、「ブルジョアは彼の Bild に似せて世界を創る」(共産党宣言)という時、彼の Bild (観念)は、彼の Bild (表現、姿)によって判ると理解することである。即ち、パチンコ屋で金を多く使い損をしてもしよげずに引揚げる人をブルジョアと考えるのである。

音楽にドからシまで7つの要素、将棋に8つの要素がある。吾々も意識を複数に分ける。しかし7つや8つに分けると、筆者の如く単純な者は混乱するので、意識を二つに分ける。さて表題「社会意識の測定」の「測定」である。この言葉は、鑑定(IQの)、鑑別(ヒヨコの)判定(及落の)などと同様に、一つの規準を予め準備してから出来ることである。例えばIQの鑑定は、90~110のIQを規準として、その規準に上下にそれるIQを、高い、低いと呼ぶ。判定では60点を規準として、高点と低点とに分ける。社会意識の測定も、右の鑑定や判定と同様に、規準が必要である。その規準は、右と同様に「普通」を規準とせねばならない。ここに普通とは、正常な意識、と考えられる。これを規準とすると普通でない意識は、異常な意識である。この意識は、例えば「人を殺したい」という様な意識即ち犯罪意識である。

以上の様に筆者は考えた。しかしデュルケムの「社会学的方法の規準」(Les Règles de la méthode sociologique 1895)第三章「平常的と病理的との区別に関する規準」を読むと筆者の考えは、社会学以前であった。彼はいう、「犯罪性(筆者註、犯罪意識と同義語)の存在は、平常的現象である。この規準に従わないと科学そのものが不可能となる」。それで筆者は、「測定」を「鑑定」や「判定」と同じ規準で考える立場を捨てた。ここに想起されるのは、ヒヨコの鑑別である。この鑑別の方法は型態上+の符号を規準とし+をもつ者を+に、+をもたぬ者を-に分類する方法である。しかし彼は、同時に、別の規準から分類する方法をもっている。即ち彼は、型態上-の符号を規準として分類することができる。この事は、大切な考えである。

「比較社会学は社会学そのものである」(デュルケム)この謂いは、比較研究(Colmparative study)なる方法の研究者は、雛の鑑別者の如く、規準を+でも-でも、どちらでもいい事、そして根本的には、どちらの規

準にも研究者が属していない事、つまり彼は、疑問符?を規準とすることを指す。しかし?は、見えないから、+又は-の型態を便宜上の規準として考える。そして雛の場合は、+も-も見え得る。しかし、例えば、財貨の交換価値を問題とする経済学の分野にあっては、財貨は、自然科学に於る雛の様には具象の型態を持たないという認識から出発する。Balance sheet に於る、支出と収入の金(百円札や千円札)は、彼に見えても見えなくても、一向に差支えない。必要なのは、ノート上の青と赤の数字又はグラフのみである。

さて社会学は、経済学と同様に社会科学に属する。社会科学は、自然科学に於る雛の如く具象からでなく、何も型がないところから出発する。その意味で極めて抽象的な科学である。例えばマートンが文化目標(Cultural Goals)を規準とし、この目標を肯定又は否定する意識、並びに意識に由来する行動様式を分類するが、吾々にとってこの文化目標なる規準は、何であつても差支えない。例えば「権威は、文化の基盤、即ち権威=文化」(パースンズ、蔵内氏)でも「自由は文化の誕生、即ち、自由=文化」(マリノフスキー)でもどちらでもいい。そして文化とは、経済学に於る財貨の如く、型態を持たぬという認識から出発する。例えば性、誇り、工場、食糧、言語、信仰、など人間存在の各種の……的構成要素の抽出である。

さて、吾々に先ず発見できるのは、文化目標を「欲しいと思って」獲得する方向に進んでいるか、又はその逆であるかの個人の行動の発見である。故にその意識の発見である。前者の行動(意識)を+後者を-とする。しかる場合に、バランス・シートの如く、+と-を記載しなくてはならない。

ここに筆者は、次の本の方法とは無関係であるが、単に題名の興味から掲げる、Moreno, —Sociometry, ① Experimental Method ② and the Science of Society ③ 1951. この①の Metry とは、数学的論理に必要な単位である。②は①に由来する現象(個々の)の説明の可能である。③は、①によって②のあらゆる場合を説明することである。数学的に考えることは、既述+と-の函数関係を考えることである。レヴィンの  $B=f(P \cdot E)$ . [ $B$ =行動(意識)] に於て  $P$ と  $E$ を+と-と仮りに考えればいいわけである。この様にすれば作図が可能ではなからうか。かつて、Bloch が行動に緯度(latitude)を、マートンが経度(longitude)なる地球分割に用いる概念を採用したり、パースンズが「行動の座標軸」(action frame of reference)を唱え、ラザースフェルトが意識なる「潜在構造」をXY両軸で作図したりす

るのも、社会学の祖、コント（1857年死）が天文学の方法から社会学を説いた行動の図式化、グラフ化の流れが続いているのであろう。既述タマスの言葉のように行動の説明が社会学であるなら、如何なる行動も一枚の紙に記載しうるグラフを作らねばならない。吾々にとって、個々の種々なる行動は、焼夷弾や、綺麗な水爆やディアボロ、という個々の爆弾にすぎない。吾々は、爆弾の設計図の方に興味があるのである。吾々は、箇々の事実から離れ、抽象的に考えなくてはならない。ドリス・ディが歌う *Whatever will be, will be*（ケ・セラ・セラ）という行動（意識）と共に、小稿の附録にいう、タマスの言葉 *Whatever is, is possible* なる行動（意識）もあるわけである。附録では、本論に必要な抽象性の練習として書かれた。そして未整理として今後に残された箇所も存在する。ところでモンテニユのいう数段階の魂から、階段を上下して犯罪者や浮浪者や、一般人など種々の階段に自己を同一視しなくてはならないのではないか。ジイドは「30才前後に、自分自身に驚く必要がある」というがこれは心の階段を上下し自分は何処の階段にいるか判らないという立場に立てということである。

小稿の内容。Iは、デユルケムの方法によって構成した仮説によって社会意識を測定しようという提案である。IIは、T. Parsons, *Essays in Sociological Theory* 1954, 最終章「社会階層の理論の為の分析的接近」に於る意識の「方向」の問題の研究である。IIIはR. Merton, *Social Theory and Social Structure* 1951, 最終章「17世紀英国の科学と経済」に於ける「ハレー彗星の軌道」の問題並びに「月の理論に必要な経度の問題」に注目し、ハレー彗星の様に一週期を経て再び出現する彗星と二度と出現しない彗星とを比較した。仮りに前者を循環気質、後者を分裂気質と飛躍的に考え、彗星によって行動の次元に於る意識の説明を試みようとした。IVはIの提案並びにII IIIの作図化である。Iの方法は既述であるが、基本問題は「吾れ思う、故に吾れ在り」の社会的表現 *If men define situations as real, they are real in consequence*（タマス）である。右は比喩的に云えば地球（環境）に対するリンゴ（個人）の気持は如何かの問題である。そして行動は、外から見れば肉体の運動であるが内から見れば意識の運動である。この運動は、*Latent Pattern-Maintenance Phase*（パースンズ、既述）、*Latent Functions*（マートン第一章）の問題である。これを作図するのが、ラザースフェルトの潜在構造のXYの二次平面である。筆者は、デユルケムの方法を採用した関係上、XとYを比較的に考

えねばならず、 $y$ を  $\sin \alpha$  の分子と考え、従って  $\alpha$  の角度に於る  $y$  と  $x$  の長さの比較を作図した。作図は、デカルトの解析学によった。以上は、社会意識の抽象的な考察であるが、「対立は異った世界観を形成させ……なぜこうした見解が生れるのか？」というマートンの疑問を作図したかったからである。何故なら例えば自殺は「社会的均衡に於る個人の危機」「社会的尺度に於ける昇降ないし傾斜」（デユルケム）といわれる。他に犯罪、非行等、種々の均衡の破壊に興味があった。

筆者は、多くの人々の見解を引用したが、本学関係では、文芸の小田教授、近松助教授、社会学の作田助教授が引用された。又、筆者の教室の専攻生山本氏は、ジンメルの *der Fremde* を訳して頂いた。お礼を申し上げたい。  
32年6月30日記

## I

議論をしていて二人の人が一つの言葉を別々の違った意味に受取っている事はよくあることである。例えば太宰治の小説「人間失格」にその事が出ている。「罪」の対義語について堀木と「自分」（太宰）の見解は一致しなかった。堀木は法律であり太宰は罰であった。前者は刑罰を法の否定（犯罪）の否定（刑法）と考える。後者の見解はドストエフスキーの「罪と罰」に於る罰である。

一つの言葉に様々の解釈がある。雨を  $H_2O$  という人やヴェルレーヌの詩を引用する人もある。ストライキに対して、「賛成の人も反対の人もある」①「何故この様に夫々異なる見解が支持されるに至ったか？」②

罪の反対語を刑法、雨を水というのは、理性的で気持がいい。しかしドストエフスキーの罰を持出したりヴェルレーヌが出てくると反理性的な見解と思われる。そして理性と反理性的の見解を抱く者が対談すれば夫々「主観的な企図と客観的な結果との喰い違い」③が見出される。所詮、理性主義者と非理性主義者は「共通の基盤を持たぬ。お互に話せぬ奴」④である。

さて話の判らぬ者が何故生れるに至ったか？ この際、しかし「判っているものから考えよう」と努力しても無駄である。何故なら全然話の判らぬ人を判る努力をするには、「多分こうなんであろう？」という仮説を設定しなくてはならない。そしてその仮説で解釈できればいいが、そして相手が了解してくれたいいが、それが出来なかつたら、又仮説を作らねばならない。吾々は、「仮説を用いようとは思わない」⑤ 仮説作製と実証の努力に無関心と諦めを持ちたいものである。

吾々に現在判っていることは両者の見解がくい違っているという客観的事実である。くい違いには原因がある

が、原因の探究は、仮説作製の欲望を呼びますから、それは止める。結果として判っている事は、両者の見解が対立していること、即ち方向が違う点である。これは「了解」<sup>⑥</sup> できる。

さて対立とは戦車と戦車が衝突する如く力学上の問題である。[ここに戦車は、吾々が見解と名付けたものである。そして戦車は力である] 力を、二つの力を夫々  $x$  と  $y$  と呼び  $x$  と  $y$  を衝突せしめよう。その際、①  $x = y$  ②  $x > y$  ③  $x < y$  の三つの場合がある。① は引わけ ② は  $x$  の勝ち ③ は  $x$  の負け である。

ところで太宰と堀木の対立が如何なる形であったか私は知らないが右の①②③のいずれかであることは間違いない。(1)であれば、目出たしの手打式即ち平和である。だが平和とか式とかいう漠然たる言葉より、引わけの言葉の方がいい。これは力の「平衡」又は「力の釣合」という対立の一状態である。(註)

註

平衡 (Equilibrium) は、K, レヴィン, 外林訳  
トポロジー心理学の原理 昭 17. 語彙一二頁  
力の釣合 (Balance of Power) は、L. Coser, *The Functions of Social Conflict* 1956; Proposition 15: Conflict Establishes and Maintains Balance of Power. (p. 133~137)

そしてこの一状態の場合には、両者は共通の基盤をもち、話せる奴だと吾々は思い安心するのである。故に平和ということが出来る。しかし①は②③と同じく広義の対立の概念の下に把握できる点に重大さがあり、関心がある。この様に考えることが社会学者としてのマルクス、ジンメル、コーザー等の集団に於る対立の概念<sup>⑦</sup> である。或いは行動に関して、ホルネイ、マートン、パースンズ、マリノフスキー等の概念<sup>⑧</sup>、意識に関して、タマス、アドルノ等、文化についてシエラー等の概念<sup>⑨</sup>、にみられる。又、自己に関してマンハイムの概念<sup>⑩</sup> 分裂気質についてアドルノの概念<sup>⑪</sup> など凡て対立の概念である。吾々ソシオロジストは対立の概念から物事を眺めるのに特別に関心を寄せる。

「比較社会学は社会学そのものである」とデュルケムは語った。(註)

註 デュルケム, 田辺訳, 社会学的方法の規準 昭 22 293 頁

そして比較するには同一の規準の下で比較せねばならないことは疑えぬことである。ここに吾々は比較の規準を対立なる概念をもって規準としたいのである。つまり

対立を比較として考えること。この様に考えることは、天秤に重量で示される物体の力を測定することである。先の二つの戦車を天秤にかければいい。しかし残念な事に吾々の戦車は本当の戦車でなく、見解、世界観、社会意識という、にせ(似而非)のそして見えない戦車である。この見えないものを天秤で測定しようというのが小稿の目的に関する方法論である。

さて店に売っている天秤の天秤棒を数学で考えると、 $\sin \alpha$  又は  $\cos \alpha$  の分母である。天秤にかける二つの力は、 $\sin \alpha$  又は  $\cos \alpha$  の分子である。[ $\sin \alpha = \frac{y}{op}$ ,  $\cos \alpha = \frac{x}{op}$ ]

右は店のショー・ウィンドウで得たが、その由来は、レヴィンの  $B=f(P \cdot E)$  からである。(註)

註 レヴィン, 前掲書 21頁

ここに  $B$  はレヴィンでは行動 (Behavior) であるが、吾々は  $B$  を「行動の主体者の意識」<sup>⑫</sup> と考える。  $f$  は函数 (function) であり、仮りに  $\cos \alpha$  の  $\alpha$  とする。  $P$  は個人 (Person) であり、仮りに  $x$  と呼ぶ、既に云った太宰の見解を  $x$  としよう。  $E$  は環境 (Environment) であり  $y$ 、堀木とする。ここにレヴィンの数式を  $B=\alpha(x \cdot y)$ <sup>⑬</sup> と考えた。

$\cos \alpha = 45^\circ$  の場合  $x = y \therefore B$  は平衡  $x$  と  $y$  の平和

$\cos \alpha > 45^\circ$  の場合  $x < y \therefore B$  は平衡でない  $x$  の負け  
 $\cos \alpha < 45^\circ$  の場合  $x > y \therefore B$  は平衡でない  $x$  の勝ち

この様に二つの力(二つの社会意識)を尺度化する。この考えは、社会意識を測定する方法<sup>⑭</sup>として考えられた。従って社会意識の体系に関する意図はないのである。理由は社会学は実践科学<sup>⑮</sup>であり目的は「行動を<sup>ヘルステッヘン</sup>解すること及び<sup>フォルグレン</sup>明すること」又は「行動に就て記録し<sup>セネラリゼーション</sup>うる一般化を獲得すること」である。(註)

註 ヤスベルス, 内村訳, 精神病理学総論 上巻, 昭 28 40頁~42頁 (了解と説明の項)

E. H. Volkart Ed, *Social Behavior and Personality, Contributions of W. I. Thomas to Theory and Social Research*, 1951 p. 2 (以下本書をタマスの本と呼ぶ)

社会学は、その事のために方法の明確を要求する。そして行動(行キテ動ク…<sup>ソシアルプロセス</sup>社会過程)は、「外から見れば単に肉体の運動であるが内から見れば意識の運動である。」(註)

註 西田幾多郎 善の研究 明 44, 「外面から見れば肉体の運動であるが……一種の意識を具えた目的

のある運動である」127頁

故に意識を運動として<sup>④</sup>理解し説明せねばならぬ。

その為に一方法を小稿は求める。

さて「平凡を拒絶する異邦<sup>フレンデン</sup>の商人<sup>カウフロイデ</sup>、あらゆる個人と接触し、人間の可能性と可動性を客観性をもって眺める潜在的放浪者 Potenziell Wandernde、人々に共通する<sup>アルゲマイノイエクアリチーテン</sup>単なる最も一般的の性質をユダヤ人特有の冷徹と‘近接と遠隔の統一’Die Einheit von Nähe und Entfernungをもって一つの‘距り’Distanzから眺める」哲学者ジンメルは、「凡ての存在を無限の生成過程にあるものと見、一切の現象を不断に変化する環境と結びつけて考える」社会学者ジンメルであった。(註)

註 哲学者ジンメルは、彼の *Soziologie* 1908, *Exkur über den Fremden* (IX. S 685~691) より採った。社会学(本文)の附録なる事に留意  
社会学者ジンメルは、彼の断想<sup>エクスクル</sup>、清水訳 昭27より得た(97頁、略伝の項)

ここに存在(各個人、各集団)、現象(行動)及び環境を P, B, E で示し、 $B=f(P \cdot E)$  を  $B=\alpha(x \cdot y)$  と考えればジンメルの言葉が理解できはしないか、そして x と y という「二種の異種概念の共存、変位」を考えるのが「分裂思考」(Schizophrenes Denken)の特色といわれる。(註)

註 和田豊治 精神医学 昭30 104頁

そして自分の中にもう一人の自分を感じそのもう一人の自分が「私の敵、私と闘っている人(しかし)最高の意味で私の味方」という謎の様な言葉をジンメルは断想(166)で語っているが<sup>④</sup>それは分裂思考なる思考形式の特色ではあるまいか。

分裂思考は、「意識の変遷過程をもつ」といわれる(註)

註 ヤスベルス、前掲書 440~443頁

分裂思考を小稿に利用するのはその故である。次にこの思考をもつ者即ち分裂気質は、「自己の人格が脅威されるという感じ…圧服威圧感をもつ。そして繊細で自我的な魂と幻想と人間界の粗野で人を傷つけ易い現実との間には深い溝がある」といわれる。(註)

註 E, クレッチェマー、内村訳 天才の心理学 昭28 193~203頁

分裂気質は分裂病の初期に於て対立的な異種概念の「汎神教、調和」統一を「懂れてやまない」(同右)これが小稿の平衡の場合に使用される。次に分裂病が進行すると、この統一は失敗する。この失敗者は、既に患者で

あり患者の言語表現は、語臆、語戯、失語であるから吾々はこの段階に於る分裂思考を用いる事はできない。それで一応健全であり、しかも夫々異った分裂思考をもつ分裂気質を備える型をもって代用したいと思う。この代用品となるのは、アドルノ(註11の本)に於る has something schizophrenic といわれる権威人型の The Manipulative (p. 767) 及び Schizoid Tendencies (p. 777) といわれる自由人型の The Impulsive が適当ではないかと思う。何故なら、この二つの型は、主として附録の項で述べている社会生活を営むに足るに必要な柔軟にして且つ規律的な社会意識を持合せていない。(アドルノ) op. 767~771, 776~778) これが小稿の平衡の破壊を説明するのに用いられる。

- ① 城戸、杉 社会意識の構造 社会学評論 13号 80頁
- ② 佐藤智雄 現代アメリカ社会学 昭29 268頁(マートンの項)
- ③ 中島竜太郎 マートンの潜在的機能(上) ソシオロジ 10号 32~33頁  
" " (下) 12号 8頁
- ④ 井垣章二 行動規準と逸脱行動 同志社大学人文学 16号 46頁 「人間に混乱や相互の衝突を最少限に止め共同生活を可能ならしめるものは共通な文化の分有である」  
シュブランガー、篠原訳 文化病理学 昭25 19頁  
「共同の精神」(Gemeingest)  
R. Faris, Social Disorganization 1948, p. 56~58  
T. Parsons, Essays in Sociological Theory 1954 p, 57  
R. Merton, Social Theory and Social Structure 1951 p. 180  
K. Horney, Neurosis and Human Growth 1950 p. 229 等に於る義務、信用、約束、相互期待などの概念
- ⑤ ヤスベルス 前掲書 25頁 仮説の項  
J. Huizinga Homo Ludens 1949 (Trans, by R.F.C Hull)  
「遊びは、宇宙の絶対的決定論が心の弛緩によって破られる時のみに考えられ理解されうる」「遊びの真の実存は、人間状況の超論理的な性格を不断に含んでいる」(p. 3)

等に見られる仮説の設定並びに目的論的見解に対する批判。主としてフロイド的解釈に対して。

伊藤 整 小説の方法 昭26 178頁

「方法的にエゴの純粋化を行おうとした作家…が狂  
氣的な淵に陥ったことは病理の側でなく、方法の側  
からも当然…エゴの真相は認識者を狂わせる」

林 房雄 白夫人の妖術 昭 31 193頁

「学我者死」

故に吾々は仮説設定より論旨を明確にする親切及び  
「世に離れ…孤独者として」(ニイチエ権力意志の序)  
自己分析の高踏精神並びに不親切と誠実性に興味を持  
たない。

- ⑥ この註で所見を挿入する。「吾々の行動は常に科学  
を予想する」(コント, 田辺訳 実証的精神論 昭13  
59頁) マートンによれば「知識社会学の第一の任務は  
諸世界観の変容の諸法則を見出すことである。知識社  
会学は真理の存在的基礎の研究のみならず, 社会的幻  
想, 迷信, 社会的に条件づけられた誤謬及び虚偽型態  
の存在の基礎の研究にも, かかわる」(佐藤, 269頁)  
その為に「思想は機能化され」(同 268頁) 単純化され  
ねばならぬ。そこに, ヤスベルス方法の了解の概念,  
デカルト方法の四命題, コントの「事実存在するもの  
Ce qui est につき, その最初の起源の追求を断念」  
(コント 53頁) デュルケムの「社会的事実を物として  
取扱うこと」(デュルケム 69頁) ウェーバーの没価値  
性 (Wertfreiheit) の理論に眼を向けねばならぬ。そ  
の際, 行動は「外から見ると肉体の運動」(西田) であ  
り行動パターンは攻撃や退却であり, その意識は外  
から見た意識の方向である。
- (7) マルクス資本論 (第七篇第23章第4節), マル・エ  
ン「共産党宣言」(第一章)。T. Parsons. OP. XV.  
Class Conflict における社会学者マルクス Marx,  
the Sociologist の項。  
ジンメル Soziologie, op. IV Der Streit, (S 247~  
336 III. Über-und Unterordnung (S 134~246),  
Cosser op. (題名の如き内容) 序によれば, 論旨の  
基礎はジンメルの理論である。
- ⑧ K. Horney op. 中 8, The Expansive Solutions :  
The Appeal of Mastery と 11, Resignation : The  
Appeal of Freedom  
R. Merton op. 中 IV. Innovation (II) と Retreati-  
sm (IV)  
T. Parsons, The Social System 1952 中 VII. 中  
Aggressiveness と Withdrawal  
T. Parsons. Essays. (op). 中 XIX Direction of  
symbolization と Direction of energy flow  
B. Malinowski, Freedom and Civilization 1944  
中 2 Union with the Absolute と Freedom of

Culture

- R. Merton, OP 中 VII. the academic fraternity  
と out side the academic fraternity, in-group と  
out -group, social functions と dysfunctions
- ⑨ Bressler, Selected Family Pattern in W. I. Th  
omas' Unfinished Study of the Bintl Brief 19  
52 (ユダヤ人とスウェーデン人等の移民の比較研究)  
W. I. Thomas, Sex and Society., 1907 に於る (p.  
35~6) 男性は katabolic, 女性は anabolic  
W. I. Thomas, Social Behavior (OP) 中 9 Philsti-  
ne personality と Bohemian personality  
W. James, Pragmatism 1908 中 1 The Tender-  
minded と The Tough-minded  
E. Fromm. Escape from Freedom 1941 に於ける  
Freedom と Escape from Freedom  
O. Rank, Will Therapy and Truth and Reality  
1950 における Will と Counter-will  
T. W. Adorno. OP. 中 XIX. High Scorers と Low  
Scorers  
蔵内数太, 文化社会学 昭18 中 セノ(二) 父性文化と母  
性文化 (M. シェーラー)  
大道安次郎 現代アメリカ社会学 中 (ソローキンの  
項 296頁) 観念的文化と感覚的文化
- ⑩ K. Mannheim, Essays on the Sociology of Cu-  
lture 1956 中 最終, The problem of Ecstasy 中  
I と Myself の分裂, 同様に Horney. OP. Cit. 中  
He と Himself の分裂
- ⑪ アドルノは, 人間の型を次の如く分類する。A. ①  
Surface Resentment. ② The Conventional Syn-  
drome ③ The Authoritarian Syndrome, ④ The  
Rebel and the Psychopath ⑤ The Crank ⑥  
The Manipulative Type; B. ① The Rigid Low  
Scorer ② The Protesting Low Scorer ③ The  
Impulsive Low Scorer ④ The Easy-Going Low  
Scorer ⑤ The Genuine Liberal [但し, Aは,  
Authoritarian, Bは Liberal, なお Low Scorer  
とは, 1Qの低さを指すのではない。権威に対する  
質問項目に賛成と反対の回答を求め, 前者に高い点  
数, 後者に低い点数を置く] 右に於て分裂気質は,  
Aの⑥Bの③である。分裂気質は, 内外界の分裂,  
断絶を特色とするがこの気質は, 『激情家と精確な  
理論家』(クレッチユマー61頁) という風に同一気  
質問に於て反対極を示す。それがAの⑥とBの③で  
ある。先ずBの③から述べる。

彼の極は刺戟性である。性質は、過敏、繊細である。彼は社会を過激に批判するが、批判の出発は気分や直感であり、批判を概念化に於て継続する能力は、疑問である。その為、政治問題に関するステープルな態度は望めない、彼の批判的、破壊的傾向は、寧ろ自己自身に向けられる。彼は自分の心臓を抉りそれを机上に置いて眺める。この自己分析過程に於て、彼は、No goals in lifeに落入る。彼の豊かな情感は、冷たい幽界に転変させられる。この危機に際し、長篇小説えの持続えの憧れが著しい。彼は、頭脳を回転さす潤活油を欲する。油は、タフガイ (A ④)、ユダヤ人、放浪者等の雑草の如き庶民ないし変った人、(stranger) 異っているもの (different)、無頼漢 (outcast) 及び神通自在をきわめる魔訶不思議なもの (悪魔、天狗、狐、妖精) など要するに、逞しく素朴なものに見出される。彼は、それに衝動的に接近する。彼は、精力が弱く逞しくないから、精力のあるものを吸収する Oral Character の変種である。彼は、雑種結婚 (interbreeding) に強いアクセントをもつ、又、乱交 (promiscuity) に対する衝動の表現がある。彼の被圧迫民族に対する同情は、右の観点から理解される。この傾向は、一部の売春婦、放浪者、サーカスの人、及びナチス黨員に見られる。彼は、思想で動くのではなく、流動的なもの、逞しいものに Mood swing をなす。他に、アル中、モヒ中などの患者、非暴力の犯罪者及びナイフを抜かされるという受身の意識をもつ犯罪者、同性愛の者などもこの系列に属する。彼らは、存在が非社会的 (asocial) であり、最も著しい病理的事例を示す。

次は、Aの⑥である。彼の極は鈍麻性である。性質は、冷酷、無感覚である。但しこの性質は、Bの③で油が切れて、こうなったのか、或いは、内心の過敏を外面的に抑制して緊張した冷淡さを粧うのか、彼は、抽象的に精確な系統的な理論を展開する。形式を好み、全世界は、勝手に断ち切られたりつながれたりする絶對的に空虚な図式を以て構成される。彼はこの図式を現実の世界に投影、拡大する。図式の実証が目的であり、図式に押し込められる人間は手段である。人に対し emotional tie を欠き打算的である。anal character が著しい。彼が学者なれば、「太陽の如く明確な報告……読者に理解を強いるところの試作」を発表する。政治家になれば異民族を圧迫する専制者となる。彼らは、図式並びにその結果 (地位、名譽) に執着する。彼の存在は、反社会的 (Anti-social) であるが、外から見れば、実業家、技師、労働貴族であり、潜在的に最も危険なタイプ Potentially the most dangerous one., 怪物 (Monster) とい

われる。

以上、B③では、乱交によりA⑥では図式によって、現実との結合を企てる。何故なら分裂気質は存在自体が疑問符であり、彼は、調和に憧れる。その微候群は右の二種があるが、例えば極めて形式的な作品の中に、極端な情緒が交錯しているのが見出される。A⑥といいB③というも、どちらの極に比重がかかっているか、主として%の問題に過ぎない。

- (12) W. I. Thomas, Social Behavior (op) p. 2 に云う、「如何に人は外的状況を認知するか、外的状況が人に意味するものは何であるか、これは、生活の主観的側面が研究者によって把握されねばならぬことを意味する」。R. Merton, op. p 179~180に云う、「人は先ず状況の外的側面が人に対し持つ意味に対し応える。人は状況に対し若干の意味を割当てた。その結果として従う行動は、負荷した意味 (the ascribed meaning) によって決定される」マルクス資本論「労働過程」に云う。「建築師は……建築する前に既にそれを自分の頭の中で建築している」「社会的信条は社会的現実を生む」(マートン p 182) 「吾れ思う、故に吾れあり」「行為は意識を伴う目的のある運動」(西田) 「社会行為に於る観念の役割」(パースンズ, Essays. p 9) 「心の社会学の輪郭」(マンハイム op p 82)

以上は、現実の行動を規定するものは、所与の客観的事実ではなくして、個人がそれを如何に解するかという主観的過程であることを認識するところから生れる。

- (13)  $B=f(S)$  但し  $S$  は psychological space これは、人 (P) とその環境 (E) とに分けて記述する事ができる。 $\therefore B=f(P \cdot E)$  (レヴィン op. 21頁) 右を  $f=\alpha$ ,  $p=x$ ,  $E=y$  とし、 $B=\alpha(x \cdot y)$  とする理由の以下の証明、

「行動は、一定の諸条件の下でのみ起る。諸条件は抽象に於て状況の概念より示される。状況は、物理的環境、当面する社会規範、他の人の行動の如く観察者及び行為者の双方に対し若干の要素を含む。これを状況の objective (客観的、外的) 側面という」(タマス op. p 2) 「この側面は環境である」(筆者)、次に「状況の外的側面を如何に知覚するか、これは、(状況の) subjective (主観的、内的) 側面である」(タマス op. Cit) 「この側面は個人である」(筆者)

社会学の分野である「社会生態学は常に人間と環境との関係を研究する」(T. A. Quinn, Human

Ecology 1950 p. 18) 「行動は存在の諸水準を個人と集団の双方に於て表明する」(タマス op. p 4) 「社会学は、基本的に諸個人と諸個人……間の諸関係にかかわる」(タマス 同) 次に「諸個人と諸個人は基本的に個人と他の個人である」という考えは、J. L. Moreno, Who shall survive? 1953, 近松良之 ABC表 性格論と芸術論のための、本学人文第8号 等に於る基本的な考えである。

- (14) 喰い違った見解 (the discrepant minds) を持つ人は余計者であるから余計者でない為に自己実現の予言 (The Self-Fulfilling Prophecy) を作図する (マートン op p 179) 彼は「あらゆる角度より」(on every score) 考察し広い認識を得ることを欲する。(タマス, op vii) ライブニッツのいう水平器の思考(若し必要ならば逆立ちをしたり寝転んで考えること)及び「遠近法的」(マートン op p 217)な考えをする。彼は、自分の方向をあれかこれかと「二度と……ぬ」(never more) ところの図式を欲する。彼は、自分の社会意識が何であるかを、天秤の如き機械ではかつて貰わねばならない。故にここにいう社会意識測定の方法を求める意図は、快樂の尺度、(ペンタム)の如き主観並びにその普遍化にある。
- (15) 小稿は、「中範囲の社会理論」(Social Theories of the Middle Range) の範例 (マートン p 5) に属するが、「抽象理論は具体的な資料で試みないと無意味である」(マートン p 180) から、将来、例えば「失業保険受給期間(半年)に於る失業者の意識過程」を調査する予定である。但し直接現実に近づける為に理論を組織化する事は小稿の別の課題である。故に小稿は、以下にのみ忠実である事を意図する。「方法論の社会的目標は、行動の理論的説明の為に、利用しうる必要且つ有用な一連の知識を作ることである」(タマス op. p. 2)
- (16) 運動的意識の理論(フランスにおける)に就て今井仙一 人間探究 昭22 67~89頁、生の過程的意識に就て 近松良之 ジンメル考(本学人文第1号 第一章)、行動の意識過程に就て小稿以下を夫々参照されたい。
- (17) 「何ものもジンメルの眼を逃れる事はできない」(ジンメル断想4頁) その眼は「なまず」(近松良之、前出書 132頁)であり、社会学者としての彼は、タマスが男性を「斗士と狩人」(Sex and Society., p 133)と語る眼であったであろう。さて彼が「私の敵であり味方」と語る人物は誰かを探そう、先ずデ

イルタイが浮ぶがこれは捨てられる。右は、「私の敵。私が生命を献げている究極的問題に対して味方でもなく敵でもない様な無関心な人」(166)である。次に彼の自画像である der Fremde に「初恋」(die engsten verhältnisse S 689)が出てくる事から、彼が失恋したと推定しよう。それと彼の Distanz の概念を結合しよう。多分「私は誰にも近く親しくないと感じた。私の顔は誰の心にもスタンプされなかったと感じた」(タマス, op. p 142)と思うであろう。その際「個体的法則」(ジンメル、道家訳、生の哲学 昭18 第四章)が想起される。それは「私の木靴が花崗岩にふれると、重い、だるい、力強い音をきく、即ち悲哀」(針生一郎 ゴーガン 7頁)「たぐいのない悩みと苦しみの源泉…同時に…汲んでもつきることのない富の泉」(キエルケゴール 榊田訳 反復 昭31 197頁)といえよう。そして「神経衰弱が人間成長となり」(ホルネイ op) 抵抗がジンメルの「より以上の生」と「生より以上」(生の哲学)及びフィリーネの言葉(ゲーテ、マイスターの中の女性)への共感となるであろう。そこから「日常生活のけだるい平板な事柄の除外の特権」即ち「一層感激的な且つ生得的に興味のある仕事及び仕事への社会的関心」(タマス (op. cit) が生れるのであろう。しかし吾々は、右の考えをドライに転向する。私は、ジンメルが語った言葉を「私」(社会学者ジンメル)の「敵且つ味方である哲学者ジンメル」と彼の二側面を分離したい。理由は、ドストエフスキー、小沼訳、二重人格、や、キリスト者キエルケゴールと作品「ドン・ジュアン論」(飯島訳)、「天国から地獄までの心の階段」という関根秀雄、モンテーニュを語る(241頁)などに見える様に文筆家は、二重人格者である。そして社会学者の彼にとって哲学者の彼は、悪ないしデモンであるが、後者が何故前者の味方であるか。マートン op. p 188, クレッチェマー op. 10頁を参照されたい。さて、社会現象に関する科学的研究は、これに当る研究者が前以て用意する概念図式の如何によって方向づけられている。ジンメルが社会学で展開する支配と従属の概念は、羊や馬に眼もくれず豹を追う狩人の考えである。その際、彼の武器が哲学から得たものであっても、この事には既に無関係である。



分裂気質並びに分裂気質の方向は社会病理現象に親近性をもつ。社会病理現象は、一見、不合理なものであるが、「この不合理な現象に理論的統制を加えるのが社会学の目的である」。(タマス op. p 2) そして不合理な現象は、「アカデミックな考えの外側」にある。研究者はこの「外側に立って社会病理現象を観察」し「観察したものをアカデミックに報告」せねばならない。(註)

註

本学、小田教授は、筆者に以下を云われた。人間は、①理性、ないし社会性と②不合理性、(愛情、感覚)をもつ。今、バケツに水と灰をほり込む。漸て濁水は a 上澄みと b 沈澱物に分かれる。a=① b=② とする。Ch. Blondel, *La Conscience Morbide* (病態意識)によれば詩人は、①から②へ行き②を①に報告する。このやり方は、夢を素直な気持ちで書く練習が必要である。次に何故②が詩人に大切か、ルソー曰く、「人若し熱病患者の夢の記録を、取ることが出来るならば、吾人はその錯乱した意識から、時々、如何に偉大な又壮麗なものが生れ出るかを見る事ができよう」(ギュヨー、大西訳、社会学よりみたる芸術、大 3、660頁) 吾々は、星(狂人)が人間(研究者)を観察する方法が必要である。即ち「研究対象は伝統的な意味での研究対象というだけのものではなく、研究に於ける行為者である。また観察や操作の対象というだけではなく、これから実施しようとする実験計画の共同の研究であり、共同のプロデュウサーである。」(Moreno, *Who shall survive?* 1935 p 46) 参加による観察という方法である。

社会病理現象の解明は、「人間性の領域を拡大し、人間像を明確にする」(ヤスペルス、前掲書 iii頁) その為に研究者は、上述の外側即ち「存在的地点」③に立ち、しかも社会的地点との「相関関係より比較研究」(註)せねばならない。

註

R. Merton, op. p 258~264 Relativism の項

さて社会病理現象は、「アカデミックな世界観とは異った世界観」より生れる。註

註

「一連の仕事に於て時にアカデミックな見解の外側を考慮したタマスは社会学に対し基礎的理論を設定した」(マートン op. p. 179)「人々は社会崩解 *Social Disorganization* の概念によって彼を立証する」(タマス op. p 1) 社会病理学として著名な彼の *The unadjusted girl* 1923 等がある。「不適応少女」は屢々

引用されている。Elliott, *Social Disorganization* 1950 (p. 16, 18, 379) R. Faris, *Social Disorganization* 1948 (p 181)

では、どうしてこのような世界観が生れるに至ったか、この分析方法に性格論と環境論とがある。性格論は、気質論に、環境論は、所与の社会集団論に基盤をもつ。この二つの方法の相関関係を数式に示したのが、 $B=f(P, E)$  である。この数式に於る P と E の相関関係への接近が「状況の規定」(タマス)、「遠近法的相関関係」(マンハイム)「潜在機能論に用いる 4W と 1H-Where, What, Why, When, How」(マートン)「社会体制と信条体制に用いるシステム」(パースンズ)「父と子、夫と妻等の関係に用いるセット」(クーン、チャップル)らがある。③ だが、「何故このような世界観が生れるに至ったか?」という疑問の解明は、世界観成立の動機の問題であり、簡単に把握できるものではない。何故なら、動機の解明を、性格、環境のいずれかの立場で考察する事は容易であるが、右の両者の相関関係を考え、その基盤を把握することは、至難である。

参考までに環境論、性族格のいずれかより、解明する方法を紹介する。環境論の方は、種々述べられているが、これは、例えば、貧困なる外的状況に対しても、それを励みとする者、自己のもつ規範(武士や裁判官等の)の為に栄養失調をいさぎよしとする者、或いは、素直に、泥棒や乞食となる者など各種であり、貧困に対する等式の行動は成立しない。次に性格論である。これは、先ず性格に対する一仮説を立て、それによって行動を説明する。例えば仮説を真理、決定論とする為に、自然科学者は、犯罪者の頭脳の骨格を測定したり、(ロンブローゾ)(ファリス、op. p 113~115) 体内におけるマンガンの量の測定(マッコラム)(E. MacCollum, *Newer Knowledge of Nutrition* 1939) をする。しかし若し犯罪者型の骨格をもち、しかも犯罪者としてでなく生活する者に対しては、この理論は通用しない。次に骨格やマンガンの様に見えるものでなく、見えないものを、ロールシャッハテストの絵や予め用意した質問項目によって再現する方法である。例えば、被実験者が所与の絵や写真から「母親的な女性」を再現したとする。そして鷲鳥に恐怖を、鳩に親しさと悲しさを再現したとする。次に個人歴に於いて、彼の母が若くして死亡し、厳しい父に育てられ、漸て彼は家庭教師になり生徒の母は美しい女性であった。漸て彼はその女性を短銃で射った、という事実が発見されたとする。ここから実験者は次を組立てることが可能である。「該青年は、幼児期に、農村でパンを持って歩いていると鷲鳥の大群が彼を取囲みパンに

向って攻撃した。彼は恐怖を感じた。そこへ彼の母が来て彼を救い上げた」「該少年は、青年となった。家庭教師になった。そこの主婦は、趣味として鳩を飼っていた。彼女が餌をやると鳩は彼女の胸に止った」この様な物語りの記録を「レナル夫人は私を母親のように愛して下さいました」というJ. ソレル (赤と黒) の法廷での告白から組立てる事は容易である。

註、レナル夫人は、クララ (シューマンの) と一見思われるが、ゴントルト夫人 (ヘルダーリンの)、シュタイン夫人 (ゲーテの) の如く、母親的要素が強い。これは、「赤と黒」を読めば判明する。映画赤と黒のレナル夫人 (D. ダリュウ) は、ミス・キャストである。

右の様に目的論的に説明ができる。右は、何より被実験者の精神療法に役立つであろう。しかしウエーバによれば政策に役に立つ様に考える、「内的世界は科学の領域外の問題」であった。註

註 「経験的の科学は、何人に対しても彼が何を為すべきかを教えるものではない」(M. Weber, Die Objektivität sozialwissenschaftlicher u. sozialpolitischer Erkenntnis. 1904 S 151)

デュルケムによれば、「社会的事実を物として見る」とが必要である。(前掲書, 70頁) 云わんとする事は、物にエゴイズム, ヒューマニズム, マンガン, 鷺鳥などの重さを加えて歪めないことである。しかし右は、物に主観的の評価を挿入してはならないという「理解に苦しむ馬鹿らしい誤解」(Weber. Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen u. ökonomischen Wissenschaften S. 461) に関与しない、「ブルジョアは、彼の Bild に似せて世界をつくる」(マル・エン Manifest der Kommunistischen Partei 1953 版…sie schafft sich eine Welt nach ihrem eigenen Bilde. S. 11) 故に凡て人間は、彼の主観にふさわしい世界を像型するのである。但しデュルケムはいう。「科学が客観的である為には、感覚なしに作られた概念からでなしに感覚から出発しなくてはならない」[然し感覚は、えて主観的たり易い。従って観察者に余りに個人的になる懼れのあるものを避けて、専ら客観性の十分な程度を示すものだけを残すようにすることを規準とし……社会的事実、それを表示する個人的諸事実から完全に切離される程、それだけ客観的でありうる……」(119~120頁) この謂いは、我々は、自分が楽しいと感ずることを楽しいと認識すること、しかし、その楽しいことに参加している自己又は、他の人を「冷やかに」註 眺めるもう一人の自分を持つことの要請である。同じ一つの事柄 (例えば宴会) で泣く人と、笑う人

の状態を比較して考えようというのが吾々の態度である。

註

冷やかに眺めることは、デュルケム「客観性」(既述)「推定と予先観念の排除」(94, 99頁) であり、又、感動一昇華一理論化の結晶作用えの要請である。そして芸術家も学者も作品に生のモデルを示してはならない。

さて「共通的な若干の外部的特徴によって予先的に定義された一群の現象だけしか決して研究対象に採ってはいけない」(デュルケム, 106頁) それで見えない行動の動機の考察は止め、現れた行動の方向を考えようというのが、最近の社会学の一傾向である。例えば、パーソンズは、Essays in Sociological Theory 1954 XIX「改訂版、社会階層中の理論の為の分析的接近」中、「システムのその状況に対する諸局面」に於て I 象徴化の方向 (練習過程) Direction of Symbolization (learning process) II エネルギー流動の方向 (実行過程) Direction of Energy flow (performance process) なる概念を用い、Working papers in the Theory of Action 1953, Toward a General Theory of Action 1954 で展開している。彼の理論は最近日本の社会学 (社会学評論その他) に於て流行している。それは何故であろうか。

社会学は祖コント (1857年死) より行動を理解し、説明する科学 (前章註 6, コント参照) であるが、コントの方法を180°転換したのがタマス (1947年死) とされる。註

註

マートンによれば「コントは、社会学の前史であり、理論上、蓄積から極めて遠い」(マートン op. p 5) 「タマスは、社会科学に基礎的理論を設定した」(同, p 179)

これより社会学は、「環境に対する個人の解釈の仕方」を問題とし、環境と個人の相関関係を考えねばならなくなった。しかし、この相関関係の基盤となる行動の動機、世界観の説明が必要となった。[社会学は、哲学からも実践諸理論からも独立な自主的の科学である、とデュルケムはいう。(295頁) しかし社会学は各種の隣接科学の攻撃にさらされ無防備である。デュルケムのいう、社会学は諸党派を如何にして支配しうるか、その権威を増大するか (同) の問題が痛感される]。この様な状況に於てパーソンズの理論が迎えられた。彼は行動の方向を Direction of……として与えた。次に因子を Symblization と Energy flow とに分けた。これは社会学にとって意義のあることである。だが彼の理論に欠点も見出される。それは、この二つの因子の相関関係を示すに足る単位、

規準、尺度の欠除である」註

註

「パースンズの叙述は極めて抽象的であるので、一々の概念の経験的該当者が何であるかを見出し難い…具体的に何を意味するかを明らかにすることは、或いはパースンズ自身にとってもかなり困難ではあるまいか？」(作田啓一 Working Papers in the Theory of Action by Parsons, Bales and Shils. ソシオロジ, No 10, 58頁)

ところで二因子(それは先ず何でもいいが)の相関関係を示すに足る単位等の設定は既に人々によって考えられていた。例えば、単位を文化目標とし、右を制度的手段に従って肯定する「順応」を規準とする。文化目標を制度的手段に従わずに肯定する「改変」又は「攻撃」文化目標も制度的手段のいずれも否定する「退却主義」又は「撤退」(マートン, パースンズ)単位を「自己」と「愛」とし、愛に妥協的に適応する「自己磨滅」を規準とし、「愛」を否定し自己を拡大する「支配—自己拡大」と愛を否定し自己を縮小する「自由—諦め」(ホルネイ)単位を自由(一切の絆の完全な欠除)とし、これを恐怖と感ずる故に、絶対ないし権威に結合、或いは自由を愛する故に、文化(政、経、法、宗教、科学的な)からの自由(マリノフスキー, フロム)単位を社会的存在とし、ここから存在的地点に退ぎ、自己(又は彼)と自己自身(又は彼自身)に分裂し、夫々の分裂の方向に行く、(ホルネイ, マンハイム)以上のようなものがあげられるが、ここに示す単位は極めて抽象的な概念であり、概念自身が問題⑩とされる。

さて、因子の比較研究及び因子の方向の問題について最初に具体的且つ単純な単位、規準が示されねばならない。それでパースンズの理論に欠点があり乍ら、彼の理論より、右の単位、規準を構成する試みがなされる。

Direction of Symbolization, と Direction of Energy flow は共に、A局面(Adaptive phase) G局面(Goal Gratification phase). I局面(Integrative phase). L局面(Latent pattern maintenance phase)を順序は異にししながら、次々に各局面を通過するという進撃(退却も含む)を示すダイナミックな位相運動の理論である。この理論には、所与の行動が合理的にせよ、不合理的にせよ「人々の云う事とやる事、の斉一性であること」(Uniformities of saying and doing of men)を前提とする。例えば宴会で泣き上戸、笑い上戸、及び酒の代りに果汁を飲む者と種々あるが、すべてそこの発言と所業は、酒の上での事である事。かくて彼は、

複数の行為者の斉一性、つまり行動の座標軸(Action frame of reference)を前提とすること、行動の座標の各種を比較すべく、斉一性を単位として、種々の行動をパラレルに考えること。具体的には、一個人(P)と、それを囲むE(即ち、他の個人P)を比較して夫々の行動の座標を検討すること、主体客体の比較主義、次に自己と他の考えを力学的な対立概念より把握すること、この対立概念を右の斉一性として考え、斉一性のフオミュラを作製すること。対立とは均衡(レヴィン, パースンズ, コーザー)とその破壊、(デュルケム, マートン, パースンズ, コーザー)の二状態があること。

さて次を述べる順序である。レヴィンによれば、人の構造はXとYとで示される。このXとYとを力と考えた場合、「平衡」(Equilibrium)なる「方向に於いては反対で重さに於いて同じである力の布置」を得る。この様な考えを個人と個人、個人と集団、集団と集団に於ける行動の次元から考察するのがコーザーの力の釣合(Balance of Power)である。ところで…EquilibriumやBalanceなる英語は、天秤なる訳語ももっている。…そこで天秤にXとYという二因子を懸けて、その大小を測定することが可能ではないか?…例えば $X=Y$ の場合が平衡である。 $X \neq Y$ つまり $X > Y$ 又は $X < Y$ の場合が平衡の破壊である。…この様にXとYの二因子の大小を天秤で測定するという発想はラヴォアジエの定量分析の理論に負うものである(小倉金之助、ものがたり科学史、昭27第10章)つまり、ラヴォアジエは化学の研究に天秤で目方をはかって物質を分析する定量分析の方法を導入した。しかし、社会学で用い様とする天秤は、頭の中にあり、見ることのできない天秤である。

この見ることの出来ぬ天秤を形で表わそうというのが小稿の目的である。その表現の為に、ラザースフェルト(P. F. Lazarsfeld)の「潜在構造理論」1950が必要であった。但し彼の本を筆者は持合せないので、彼の研究者、安田三郎氏の見解(社会学評論 14, 23)を引用する。これは、社会意識測定モデルとして貴重である。彼は、X軸とY軸を図示する。彼は、(1)尺度化の諸技術に共通の理論的基盤を与えた。(2)定的標識に対する因子分析法ということが可能である。(3)若い理論であるか、尺度化の問題に対して正攻法により挑戦する理論である。(4)新しい尺度化のテクニックを提示した。(5)軌跡線の導入も、尺度化の統一的理論にとって大きい意義をもつ。

次に参照されたのは、藤原喜悦氏「社会態度の問題の構成」(青年期に関する心理学的研究 昭31 p 222~244)に於る三つの図式である。①社会態度の因子構造(Thurstone, p 223) ⑤社会態度の因子構造(Ferguson L.

W: p 225) ③社会態度の因子構造 (藤原 p 244) である。①は、a. 保守主義一過激主義の因子と b. 国家主義一反国家主義の因子の二つを軸として十の字をかく。②は、a. 神の存在, 進化, 産児制限の共通因子と b. 犯罪者に対する取扱い, 死刑, 戦争の共通因子の二つを軸とした十の字を円で囲む。(3)次に左の如き二因子で構成される十の字の向って右側のみを図示する。

以上筆者は、均衡理論より天秤理論を、及び右を図示するに役立つと思われる以上の図表を得た。故に筆者は、以下を想起する事にも、努力を要した。デカルト曰く、「疑うことの出来ぬ唯一の知識は、代数と幾何学である」「点Pの位置及び直線の表し方」「三角法」(小倉金之助, 5.8. の各章)

以上は、次の四つの事柄を念頭に置く場合に生れるであろう、(1)思っている事と結果の喰い違い (マートン, 近松良之, 太宰) は(悲しいことであり)、喰い違いの析出は社会学的知識の有意義な増大を示す。(マートン p 68) (2)何故喰い違うのかの分析 (マートン, 近松) (3)方向よりの分析 (マートン, パースンズ) (4)一つの単位よりの把握 (パースンズ) そして以下を得た。

- (1) 平衡の考えを天秤と考えること。
- (2) 化学の定量分析の方法を導入して社会意識の因子分析をすること。
- (3) 天秤を具像化し、因子の大小、を測定し、天秤の調和と不調和を作図すること。
- (4) ピタゴラスの定理, デカルトの幾何学, 及び三角法を用いること。
- (5) 自由意識 (x) 権威意識 (y) 自由 (X軸) 権威 (Y軸) に於いて性格類型 (点Pの位置より) の作図をすること。
- (6) 天秤にかける  $x$  と  $y$  を、同質とすること、つまり必要の充足状態 (これを権威とする) は自由を生まぬ。自由 100% 即ち「一切の社会的絆」(これを権威とする) の完全な欠除である。この観点より、自由と権威は、先ず量の問題として同質であること、これを認めてから、自由と権威という相異なる方向の行方を観察すること。
- (7) 以上の為に三角法を用いること。

さて小稿の方法論である分裂思考を三角法によって説明することが当面の義務となった。次にそれを以下の課題に対し接近させたい。以下の方法は、自己の存在する地点を固定したものとせず、地点それ自身を回転さす一云わば、大阪のコマ劇場の舞台の如き一ものである。或いは、遊園地の廻転式昇降箱が想起されるであろう。

- (1) 存在的地点は、マンハイム, op. p 209 An existential distance より採った、彼は、この言葉を (d) Social Distance and the Democratization of Culture の項で述べ、ヘーゲル, ジンメル, ウィーゼ, パーク, ボガードス等に於ける Distanz (distance) を引用するが、要するに、彼のいう distance とは、小稿にいう「距り」である。マンハイムは、「彼は、existential distance に退く、recedes」彼は、これを、「愛」「エロチックな軌道 sphere から観念愛へ台座を置く」場合に用いている。彼は、この発想を恐らく、キエルケゴール「愛について」に於る Distanz, ニイチエ、「権力意志, 序」と於る「世に離れ」から採ったのであろう。そして distance は、「祖先, 結婚, 子孫に対して遠すぎる (場所)」(カフカの手紙) を指すのであろう、この場所は、「地理的なのでなく、社会的」(ゾーボウ, op. p 13) 「生物学的にマージナルなのでなく、文化的にそうなのだ」(エリオット, op. p 581) である。このことは、小稿 1 及び附録に示したジンメル der Fremde に、示される。彼は、蒙古や離れ島に住むのでなく、ベルリン, ヴェニス, 京都などに定住する。しかし彼は「百万人が、生み出した、吾々の文化の異質な人物 the heterogeneous character」(エリオット p 581) である。彼は、稀少価値をもっている。稀少な者は、若し力と才能があれば、余計者 (outlaw, outsider) として普通と異った見解を述べ、自己の傘下に人々を吸収し out-group を形成するであろう、しかし力のない者は、除け者 (outcast) となり、「自然淘汰の累積的過程」(ゾーボウ, p 129) を経て経済秩序外のスラムへ行く、註或いは、南洋へ行き、更に土人の間でも除け者になる。(コンラッド, 文化果つるところ An Outcast of the Islands 1896) scum of earth (此の世のくづ) である。

註 シカゴのスラムは、範囲が広く、貧民の他に、ギャング, 女蕩し, 等も含む,

- ② タマスの見解は、1 の⑬も参照のこと。マンハイムの見解は、p 67 の相対主義, 認識に関するソクラテス, ソフィスト, p 151, デカルト p 184 (マンハイム op) また、マートンのマンハイムの項 p 261 ~264, 遠近法と相対主義 p 231~5 等にみられる。なお遠近法とは、研究者が対象に対し位置する場合、彼に近い対象と遠い対象とを比較して考察する方法である。例えば画家の方法である。それは一つの画

面に見出され、又、比叡山を下鴨と桂の夫々別の地点から描いた二枚の絵に於て見出される。前者の山は、凸、後者は、凹である。この方法を意識に応用すれば、‘感覚から考える人’や、‘理性から考える人’を比較できる。何故なら研究者は、モンテーニュのいう「数階建の靈魂」*âme à divers étages* をもつ。次はマートンの見解である。「集団の間の価値や態度や思考様式の対立は、異った世界観を形成させる」  
「何故こうした見解が支持されるに至ったか?」「この疑問に対し、一定の共通な前提条件に依存する一連の解釈が要求される。思考は機能化されて説明されねばならない」その分析項目、1. どこに心理的生産の…? 2. どんな心的生産が…? 3. いかにして心的生産は…? 4. なぜ…心的生産に…? 5. いつ存在的基礎 (the existential base) と知識との、帰属関係 (the imputed relations) は得られるか? (マートン op. chap. VIII)

次は、パースンズの見解。彼の社会学は、行動の一般理論である。彼の理論は「現状の知識では不可能である。so far as our knowledge…… under the conditions in question」(The Social System p. 486) と自ら語るように、又、本章で作田氏が語られる様に、筆者は、更に彼の理論が判らない。[これに比較して、マートンの本は、チャップリンやミッキー・マウス、イソップの狐、孔雀の彫物、野蠻人、月、太陽、航海などの言葉が飛躍的にあでやかに展開されるので、読みごたえのある本である] パースンズは、強度の心理主義の反映と形式性をもつが a major and pioneer work といわれている。彼の行動の理論は、先ず「行動の座標軸」(action frame of reference) を設定する。[Easay, System, General Theory に共通] 次に「人々の云う事と所業の斉一性であること」を前提とし、均衡 (Equilibrium) なる概念を用いる。次に人の中には、「意識と行動のくい違い」ないし「言行不一致」の人もある。即ち均衡と逸脱 (deviance)、不均衡 (disequilibrium) の問題が見出される。しかし均衡は、勿論、不均衡も、新しい結果や制度化を促進して再均衡 (re-equilibrium) をもたらすという。彼の考えは、大局からみて世界は、調和、均衡であり、又はあるべきだということである。さて、行動の座標軸は、次の二つの軸をもつ。構造的側面 (structural aspect) と動機的側面 (motivational aspect) である。前者は、Belief system and the Social system という場合の社会体制、後者は信条体制である。前

者は、外的状況ないし環境、後者は、内的状況ないし個人の Idea といって差支えない。後者は、象徴化 (Symbolization) 及びエナージ昇潮 (Energy flow) の二方向をもつ。

次は、クーンの見解である。パースンズの大上段に構えた心理学的メカニズムに比し、クーンは、謙虚な態度である。彼は、人間関係を研究する鍵は、人間オルガニズムの生理学的性質の観察にあるとする。彼は、人間関係は、人体の作用の一つの機能と考える。(E. D. Chapple and C. S. Coon, Principles of Anthropology., 1942. 第一部、生物学と人間関係)。その第二と第三章で、視床下部、自律神経組織及び内分泌腺の関係を説き、「人間有機体は常に平衡 (equilibrium) を保とうとする。平衡は、右の三つの連関せる働きによって得られる」この平衡の破壊は、「神経症型や精神病型に見られるという。」(p. 52)。[この見解は、最近の、ストレス学説にも見出される]。さて、クーンとチャップルは、 $Y=f(x)$  なる数式を用い、例えば家族の一員が病気になった場合に医者 の出現は、如何に、家族に作用するか? 等を考察する。(p. 47) 或いは、一人の男性の行動が、その相手となる人物によって変化すること、その為に、1. 親子セット (the parent child set) 2. 女性・男性セット、3. 男性・女性セット、4. 年令セット等 set の概念を使用する。

[本章の註でパースンズとチャップルに於ける平衡及び対 (方向、セット) の概念は、前者の心理学、後者の生理学の違いはあるにしても、互に似た考えである。しかし彼らの欠点は、集団論の欠除である。これは又、小稿の欠点でもある。集団間に於ける、平衡や対の概念は、マートンの弟子、ジンメル の継承者コーザに見られる。彼については、後日の機会を待ちたい]

- ③ 例にマンハイムを採る。彼は、既述の本の p. 209 や、最終章「陶酔の問題」(The problem of Ecstasy) で I と myself の分裂ないし I-myself relationship の興味 の集中化 [即ち自問自答] を述べる。これは、特色のある問題意識として読者に訴える。これは、Diagnosis of Our Time 1943 の「価値判断の危機」(第二章) に於ても見られる。しかし彼は「文化社会学」並びに「現代の診断」の二著の結論に、キリスト教を述べる。それは後者の本「新しい社会哲学への道」(第七章) に著しい、しかしこの結論は I と myself の問題を一種の政策にすり

かえる。だが吾々は、自己の救いの為に、読書するのではない。社会学は世俗的なアプローチをもつが、それは、宗教や哲学の様に、行動に意味と方向を教示する為ではない。行動を説明する為である。マンハイムは、結論として彼の信仰を読者に押しつける。信仰は自由であるが、それは、本論の註や附録の形で必要ならば書かれるべきである。

マンハイムの I-myself の概念は、興味がある。しかしマートンによれば、マンハイムは「思想と社会との関連について明確な規定をしなかった」(形而上学である)「なぜ当面する人物が、この種の思想を表明するに至ったかの説明がない」「彼の分析は、社会構造と知識との関係の類型や様相を特記するという失敗によって限界づけられている」(断片的である)「この空隙が知識の存在拘束性についての彼の中心問題の核心をあいまいたものにしてている」(如何なる思想が、如何なる社会的存在に如何に拘束されているかについて余りに一般的且つ抽象的である) [マートン op. IX. K. Mannheim and the Sociology of Knowledge. 及び VIII, The Sociology of Knowledge) …[しかし、彼に対するマートンの批判は、小稿にも当てはまる、だが小稿は、結論として宗教や南洋や、仕方がないの世界に逃げず、数式に終った事が、せめてもの喜びである。マートンがマンハイムに学び、後者を乗り越える為に、心理学と数学をラザースフェットに学び、著の一頁に、「その創始者達の忘却をためらう科学は消える」。理論と調査の法典作製の為にこの本を書いた、という気魂の万分の一でも、筆者も持てる様に、小稿の図式は書かれた]

## II

対立といっても夫婦間の対立は、対立の基盤に性や金銭、があり、別離か和解のいづれにしても、起承転結の筋書きを辿るわけである。しかし世の中に、多数者の立場から見て意味不明と思われる発言をする者がある。この者の発言が相手を困らす為とか、皮肉とかでなく、本人は真面目に自己が感ずる疑問や見解を述べる場合、その相手になる者は、うんざりするであろう。ピントが合わず少くとも一オクターヴ外れている特異児的な大人、自分の特殊な経験から考える tough-mind なる人、パーソナリティ構造が不柔軟 (rigidity) であり局面の変化に際し、行為変更 (alternatives) のできぬ判らず屋 (pig-head), こおいう人と話をすれぼうんざりする。

さて、人間関係一般を特長づけるところの共通の文化

の分有つまり「了解性 understanding と親交性 intimacy の段階 grade, 程度 degree」の減少 (to reduce) を「距り」(distance) という。(Zorbaugh. op. p. 242) この距りなる概念は、measurable term として「垂直的距りの意識」を指し、「人と人との間に……」常識化、「習俗化した」アト・ホームな「社会関係が、‘重んぜられぬ’ regardless こと」(マンハイム, op. p. 209) を指す、この距りが存在する客観的状态が、意識の発動として混乱ないし衝突である。「話せば益々判らなくなる」

人が人に対して社会的接触交渉を可能ならしめるものは、諸個人の行動の相互的予見可能性又は期待に基づく。この期待とは、彼が「行こうであろう範囲 the range, 及び許された限界 permissive limitations, 及び限界から離れ得る緯度 latitude」(H Block, Disorganization, Personal and Social 1952 p. 323~4) が先に判っていることを指す。吾々は、この期待の下に、人に話しかけたり、執筆したり、学会で発表するわけである。期待の基底は、常識であり、故に、当然判っているものであるから、最初にそれを、時間的制約上、省略して直ちに主張を開始するのは、一般に学会の常識である。しかるに発表後の質疑応答の場合に、今迄述べた事が何も判っていない様な、或いは、常識以前の質問が提出されると、発表者は、うんざりする。それで適当にお茶をにごし、「お説ごもっともです。何分、未熟ですので、その事について改めて研究致します」と答え、降壇し、外へ出れば、右の質問者が彼を待伏せし、再び質問する。これは一種の脅迫である。それで逃走すれば、質問者は、追跡するか、或いは、立腹して引返す。この両者間には、例え、後者が前者に自動車によって追いついたとしても、心理的に距りがある。この距りが既述の距りである。

さて、一つの外的状況の規定の仕方、即ち行動の座標軸の拠点は、人によって様々である。それで自己又は他人 (例えば A 氏) を恒星 (fixed star, 例 太陽) とし、相手 (自己又は A 氏) を遊星 (planet, 例 地球) ないし衛星 (satellite, 例 月) として、固定した場所から離れる相手の経度 (longitude) を計算しなくてはならない。即ち、経度の測定によって運動 (意識, 行動) の軌道 (orbit) が、判明する。右は、Whewell, History of the Inductive Sciences 1858. p. 434 に於ける「月の理論」(Lunar Theory) 即ち、「経度を発見する事の方法…その基礎に於て完全さを示す理論の実証は、航海者、地理学者及び広く承認された価値 Vast acknowledged value にとって直接的、實際的利用の対象と同一視される」(マートン op. p. 355) なる一文より構成した。

ところで、右の太陽を常識という見解とする。いま、この常識のない人と話をすれば、或いは、対談する二人の人が自分の方に常識があると主張してゆずらない場合、二つの太陽（二つの常識）は、あり得ないから、既述、月の理論を利用することはできない。しかし常識がないこと、ないし、常識は変化するものであることを認めるのが社会学の常識であるから、自然科学に於ける月の理論は、最初から役に立たない。

〔常識—普通一般人の有する……—一般の見解（新村出、辞苑）→集会感情 *sentiments collectifs*（デュルケム p. 102）= 共同の精神 *Gemeingeist*（シュブランガー p. 19）〕〔常識—普通一般人の…有すべき…—一般の見解（新村）→人間に混乱や相互の衝突を最少限に止め共同生活を可能ならしめるものは共通な文化の分有である。〔註4〕→文化は禁止と命令 *proscription and prescription* である。（ブロック、p. 89）→文化は、社会規範であり「普及的慣行 *prevailing practices* である」（マートン、p. 126）即ち、道徳である〕〔常識即ち…道徳は変化する。「土地に縛りつけられた農奴の剰余労働を占有する制度は農奴制的道徳を作り出したが、他人の勘定で貨幣所有者の為に働く自由労働の制度は農奴制的道徳に代ってブルジョア的道徳を作り出した。問題（道徳）は、すべて二つの社会的組織形態の交替に帰着される」（レーニン）〔即ち、常識、道徳ないし道徳的価値（善、仁、義の如き）は、神（*Sein*）の様に存在する（*sein, ist*）のでなく、変化する。即ち、近松氏のいう（ジンメル考126頁）*Welt ist nie, sondern weltet* に倣って云えば *Welt*（世界）を *Wert*（価値）に置き換えればいい〕

さて次の言葉より分極（*polarization*）を作らねばならない。「世界、車輪は…極限から極限へと転々する」（ニイチエ、ゲーテに寄す）「一方の極での富の蓄積…その対極では、貧困の蓄積」（マルクス、資本論）又、次より、両者間に深淵または、「限界」（*horizon*）を作る。「憤怒する者は苦悩と呼び、道化する者は喜戯と呼ぶ」（ニイチエ）「彼らは彼らの姿に似せて世界を作る」（マルクス、エンゲルス）「社会は、二つの大きなもの *zwei grosse*、直接に相対立する、それに、分裂しつつある。 *spaltet sich*」（同）、次に両者を運動として把握せねばならぬ。「ブルジョア（思想家の一部）がプロレタリアートに移行する *sich hinaufgearbeitet haben*」（同）〔故に、その逆もありうる〕。運動は、エーテルやホルモンや神などの原動者によって説明する必要はなく、運動の条件は、対立物の斗争である。「歴史は…斗争の歴史である」（同）運動は〔行動は〕両者間の相互作用（*Inter-*

*action*）である。（R. F. Bales, *Interaction Process Analysis* 1951）

運動は、神や、太陽など *fixed star*、なる独立した実体ないし絶対的認識を否定し、男と女、金持と貧乏人等、両者間の相対的認識より把握される概念である。吾々は、行動を考える場合、いまや、太陽を軸として、地球や、月の軌道を計算する「月の理論」を放棄する。そして天体を以て行動を説明する場合に残る星は、彗星（*Comet*）と星くづ（*star dust*）である。但し後者は、既に、くづなので吾々に不必要である〕

彗星とは、何か、彗星の軌道は「楕円形又は、抛物線状、及び双曲線状の軌道である」（新村、辞苑）楕円の数式は、 $\frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1$  である。これは、ハレー彗星（*E. Halley's comet*）の如く、「一度出現してから再び一定の週期を以て復帰するもの」（新村）である。次に「然らざるもの」（同）は、抛物線及び双曲線の軌道を運行する彗星である。その数式は、 $y = -ax^2 + \frac{a}{x} + b$  である。ここに仮りにハレー彗星をA彗星、他をB彗星と呼ぶ。

A彗星は、76年（この時間は、人間の時間では、75日位であろう）たつと、76年前の地点に戻ってくる。循環（*Zyloid*）する。彗星は「太陽の周囲の既述の軌道を運行する星」（新村）であるが、A彗星は、太陽に一番近い地点から離れても、再びそこに戻って来る。起承転結の法則が見出される。A彗星を人間に同一視しよう。彼を *M. Thompson* の小説 *Not as a Stranger* (1956) の主人公とする。彼は、仕事に失敗し且つ妻に振られて、情婦の許へ行くが凡そ75日程たった或日、雨が降った夜、*Help me, pardon me* と泣きじやくりながら家へ向う。これは、ジンメルのいう次の言葉の後者の場合を家を形式的に考えるなら指すであろう。「畢竟吾々の歩む凡べての道は、吾々が家を出てこの道を進んでいるか、それとも家へ向ってこの道を進んでいるかによって規定されている」（断想 80）

さてヘルダーリンは語った。「生命の糸はとりどりにして、谷のごとくまた山々の境の如し。われらこの世にかくあるものを…」と。ニイチエは、語った。「ヘルダーリンは、…亡びてしまった。所謂、ドイツ的教養の気候に耐えおおせなかつたのである。そこでは…、金属性の人間だけが、ふんばり通せるのである」（反時代的考察）ニイチエ達は、「未来的なるものを是証し…現在のなるものに於て没落」（ツアラトウストラ）する人であった。さてニイチエやヘルダーリンの作品に興味がなく、彼らの発狂に興味のある吾々にとって彼らは、落下し再び姿を見せぬB彗星である。人はいつれは死に、血管、神経、

並びに体液の変化がくる。それは、50才以降の問題であるが、50年の時間が、極度に短縮され、とりわけ神経の変化が著しい場合に、人々は、彼の異常に気づくであろう。そして「自殺の大部分は、精神病者 *insane* であった事が明確に説明される」(Cavan, *Suicide* 1928 p. 112 ~3) の問題も見出される。

さて、ヘルダーリンやニイチエの作品の主張は、「死にたい奴は、死ねばいい、俺はこれから朝飯だ」である。彼らの主張は、ギリシャ人や金毛獣であった。しかし本当は「あたたかい生命、感じ易い心情」(クレッチェマー)、「道徳的な人間、子供をさえ侮辱出来ず、少女のように純潔」(シエストフ)であった。しかし、この様に、「思っている事と結果のくい違い」「意識と行動のくい違い」は、競争社会に於ては狂人としてでしか長命できぬであろう。

[次に、B彗星の中に、ルンペン・プロレタリアート、(資本論、及び宣言)や、*jungle of human wreckage* (ゾーボウ p. 129) というスラムの住人が入るであろう。これの発生は、附録に若干述べるに止める]

本章を次の如く結びたい。A彗星を循環気質とすればB彗星は、分裂気質であろう。しかし分裂(わかれさけること)とは、何かから分れるという時間的結果である。その元は、何か。Bに示した抛物線及び双曲線は、Aの楕円の変形又は、分裂、ないし楕円の切断と考えて差支えないであろう。[なお本章は、マートンの本の最終章に示される「月の理論」と「科学者 Halley」なる言葉、及びその前章に示される「科学者 Einstein」なる言葉より構成した試論である。天文学的方法是、コントの「実証的精神論」が「通俗天文学の哲学的汎論」の序論として書かれた様に、社会学の徒に関心を抱かせる。但しコントの死から一世紀を経た現在、吾々は、星を頭の中の星として理解する。マートンの本が「潜在構造理論の Lazarsfeld から多くを学び」(p. 18), 第一章が *Toward the Codification of Functional Analysis in Sociology* なる副題をもつ潜在機能論であり、著の副題が理論と調査の「法典又は電信符号の作製」(codification)へであるから、未熟な筆者も天文学がもつ幾何学の図式を作ってから、今後、新聞紙上や、個々の身近なケースに接近したい。その為に、次章の作図と共に、ニイチエのいう「ゲーテ、ワグナーという様な金属性人間…ふんばり通せる(人)」が必要である。但しこれは附録として述べねばならない。]

IV

距りといい、均衡とその破壊というのは、行動の前提として頭脳に潜在する意識の状態に他ならない。距りや

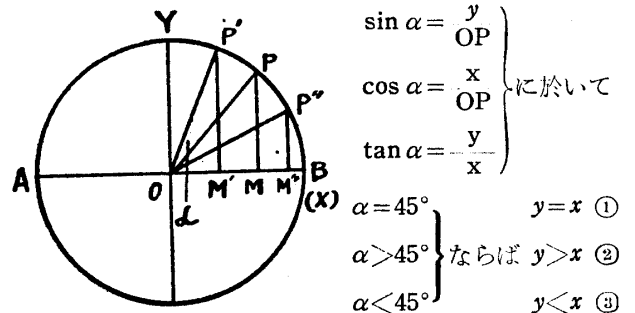
均衡の破壊は、世間から隔離された状態にある個人や、失業者や、離婚者や、スラムの人間が感ずる意識の状態である。「*Alone alone, always alone. No mother, no father, no real friends. I was sick, tired, and disgusted (ゲロ) my faith has had cuts and jags (ギザギザ) all my life.* [強盗殺人団の姉姐おトラ, *Tiger woman* の手記]

*No money, no freinds.* 私は人々を怖れる、人間がなすことは何であるか、*No place I can go.* 馬鹿がそこにいた。そしてそれは俺である。地獄へ、死にたい。狂いそうだ。[麻薬中毒者の日記]俺は問いだけの生活です。[*has to meet his problems alone (Zorbaugh op. p. 136~139)*] この様に、自分の中にもう一人の自分を感じた人の意識である。

このような人間の意識は、社会生活を基礎とした場合、そこから、何か(etwas)へ行くのであろう。このETWASを仮りにXとYとなづける。次に、以上の如く混乱した意識の出所は、社会生活が見失われた時に起るから、社会生活を先ず基礎として考える方法は、消失する。吾々はXとYという何物かより考えねばならない。ここに  $X > Y$  ならば、YからXへ、 $X < Y$  ならばXからYへ、意識が流れる、いまXとYとの軸内にある点Pの位置はXまでの距離yとYまでの距離xによって決定される。xとyを夫々の意識と考える。すると、sin, cosの各カーブは、半径OPを軸として、円周の一点点Pの軌跡をx又はyの長さから表現したものであり、tanのカーブはxとyを表現したものである。故にこの三角法を用いて意識の時間的過程を作図することが可能である。

故に次の命題を、作図せねばならない。「P点の位置はxとyの長さが等しい場合と等しくない場合とがある。P点の軌跡はOP円周にあるが、OPを天秤と考えて、 $x=y$ ,  $x \neq y$  を作図すること、但しy(又はx)の拡大はx(又はy)の縮少を意味する。

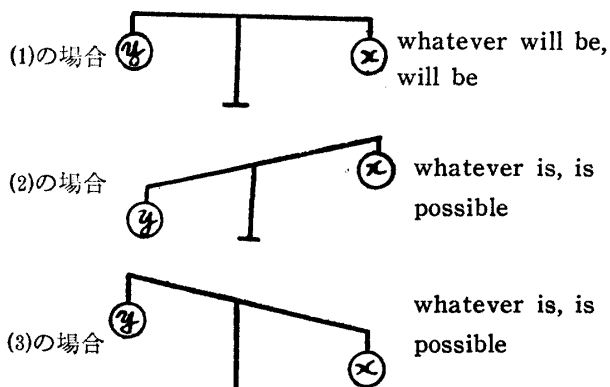
xとyという因子分析のための作図



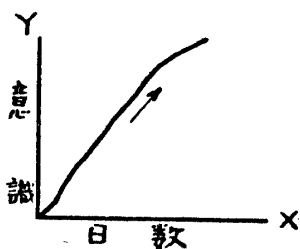
(但し  $pM=y$ ,  $oM=x$ )



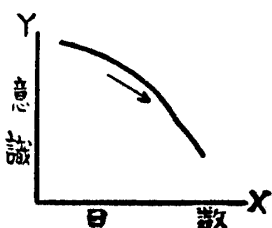
OP 又は whatever という天秤, 又はシーソーゲームのシーソー台



参 (2)の場合  
考

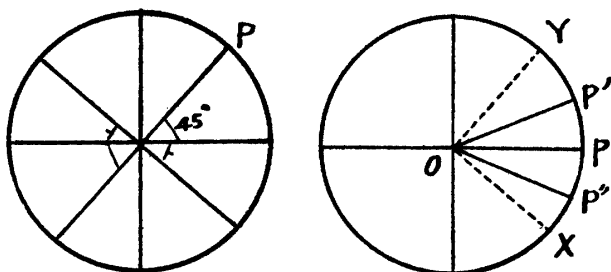


(3)の場合



次に以下の命題を作図せねばならない。「 $y=x$  の場合を  $45^\circ$  の緯度とすれば  $y>x$  の場合は、 $45^\circ+\alpha$ ,  $y<x$  の場合は  $45^\circ-\alpha$  である。いま、 $45^\circ$  を  $0^\circ$  (赤道) とすれば、 $y>x$  は北緯  $A^\circ$ ,  $y<x$  は南緯  $A^\circ$  で示される。但し  $A^\circ<45^\circ$ 」

方向測定のための作図,



(対角線, 及び相似形の定理)

附 録

さてロシア民謡に「仕事の歌」「ヴォルガの舟唄」がある様に、又の I 註 (17) に於けるタマスの見解がある様

に、吾々は、多少とも仕事によって狂熱的なものや空想的なものや、宇宙へ突入しようとする傾向がある様である。例えば画家が一つの山を種々の地理的地点から考察し、新しい画材を発見することは、彼にとって感激である。しかし一層の感激は、今迄描いた多くのデッサンをばらばらに分解し、混乱せしめ、しかる後、右を自分の頭で統一して独自のものを設計する過程に於て見出されるであろう。社会学者 William Isaac Thomas (1863~1947) は、この画家の様な心境で仕事をした人と思われる。

マートンは、次のように語る…「若し人が諸状況を現実として規定するなら、諸状況は、その結果に於て現実である」とタマスは書いた。この言葉は、社会学に基礎的定理を公布した。これは、ニュートン理論の範囲と正確を欠いているが、しかしニュートン理論と同様にふさわしい贈物、多くの有望な適用できるものを持っている。とりわけ社会過程(行動)に対して」(マートン, op. 179) タマス理論は situational approach の父として「状況の規定」の概念を指す。即ちタマスの立場からニュートン理論(三大発見の中の万有引力とすれば)は地球(環境)に対するリンゴ(個人)の気持は如何ということであろう。

さて所与の環境に対し、各個人の思い方は様々である。「私は得たもので満足する」「私は安全に振舞う」「高い目標を持たなければ失敗しない」「目立つことをしない」(マートン op. 141)「なりゆきにまかせる」(アドルノ op. 778) という様な人生哲学 (life-philosophy) は、庶民的な顔立ち(ソバカスのある)のドリス・デイ(映画、知りすぎていた男)によって語られている。即ち、美人 (pretty), 男前 (handsome), 金持及び素晴らしい恋愛 (rainbows) の願望に対し、「先のことは判らない the future's not ours to see」ケ・セラ, セラ whatever will be, will be. と。この様な発言は、アドルノによれば、「物事をエンジョイする庶民」であり、彼によって The Easy-Going の自由人と呼ばれる (p. 778~781)。この型は「サイコロジカルな豊かさ、想像力、ユーモア」をもっている。しかし「圧迫に対する抵抗は消極的であり、内省的且つ優柔不断であり、世界は、古代的な家母長的な色彩を帯びている」(アドルノ 同右) 彼らは「長いものには巻かれる」傾向を持ち、「自己の役割を規定する内面化した規範的諸様式に執着する」(マートン 同右)。しかし一種の生活に関するずるさを持っている。「翌日も同じ事を繰返して、昨日に異らぬ慣例に従えばいい。荒っぽい大きな欲楽を避けてさえいれば自然大きな悲哀もやって来ぬ。ゆくてを塞ぐ邪魔な石をヒキ

ガエルは廻って通る」という態度の方が人生の幸福の総和が大である。途中で息切れがしない。安全と信用を得ることが出来る。見知らぬ人としてでなく、当り前の人として世間に包まれる。「今日は」「お早う」「お疲れさま」と吾々は、人に好かれる様に致しましょう、と彼らは思う。この態度は「自己磨滅」(オルネイ p. 214~238)「鎖磨主義」(マートン p. 140~142)「妥協的立場」(S. A. Stouffer, *An Analysis of Conflicting Social Norm, in American Sociological Review* vol. 14. 1949)「個人の社会的均衡」(E. Durkheim, *Le Suicide* 1897. p. 271)「大きな広い道の真中をゆく」(関根, モンテーニユ op. 24)「Half-and-Half の哲学 (中庸)」(林語堂, 阪本訳, 生活の発見 210頁)「中庸, 穩健化に対する要請」(スリクター, 高木訳, 中庸化の進展, アメリカーナ, vol. 3. No. 2 p. 40)「集団圧力への同調」(クラッチフィールド, 長島訳, 同調と性格, アメリカーナ vol. 2 No. 3 74頁)等に示される。そして「中庸の歌」(林語堂)に私と君, 個人と社会の中庸化の原則が彼らの生活のモットである。

さて社会の病理現象の研究者は、右の哲学に無関心である。何故なら彼の対象は「見たところ非合理的なもの」(マートン op. p. 64)である。故に彼は、対象と同様に特別の感情機構と思考機構を必要とする。その際中庸の哲学がもつ微温的な態度は、問題の本質をそらす傾向がある。故に「素朴な道徳的判断をもって社会学的分析におきかえることを排除」(マートン op. p. 70)が大切である。その際、想起されるのは、タマスが孔雀の置物に彫み、好んだという次の言葉である。whatever is, is possible. この啓示 (Revealing words) を「私は社会学感覚充て受取る」とマートンはいう (op. p. 195)。

この言葉を分析してみよう。(1)「在るものを在るがままに確認する事は、かくあるべきだというよりも名状しがたく高く厳粛な事である」(ニイチエ, 力への意志 333)。この立場に立てば、右は積極的、意欲的、自律的な言葉となる。(2)「存在するところのものは、それが何であっても、それは在り得る」(原文の直訳)「生活は、地の下にもある」(ドストエフスキー, カラマーゾフ第十一篇第四章, 信条告白) この言葉に続くミーチャの言葉、「いついかなる瞬間にも我れは在り、塔の中へ閉じこめられても、矢張り俺は存在する。存在して太陽を見る。太陽は見えなくても太陽のあることを知っている。それを知るのは、既にその事自身が全生活である」。これは、社会生活を営むに必要な persona を剥奪され、ホリゾンタルな地点に追放された受難者に遂に訪れる生の歓喜である。(3)「自分は一体どうなるのだろうか」(梗概の

ジイド) 存在を規定する社会生活が失われたら、不安である。彼は今迄統一されていた「彼の二側面の分裂を知る」(ホルネイ p. 189) I am a stranger to myself (マンハイム p. 209) これは、Self-distanciation 又は Alienation from self の状態である。それは、月の夜、公園のシーソ・ゲームに乗った「私」と「私自身」という全く非人間的な寧ろ透き通るほどデリケートな願望の姿が、自らの意志を持たずに月の光波につれて上下するという童話に似た状態である。だが、ここに抽象的な月の光こそ「天才及び分裂病者に訪れる恍惚であり、彼は、それによって仕事をしたり、或いは、人には訳の判らぬことを口走る」(クレッチェマー, op. 193, マンハイム p. 209)。そして月が雲に隠れてしまえば、どうしようもない「疲労の沈滞、倦怠、無思考」「日常の理性と感情が途切れ空虚な不連続な断点と放心」が訪れる。故に彼は、黄昏 (Twilight) や満月の夜まで無為となる。(4)以上の分析をタマスは、笑うに違いない。それで彼が孔雀の置物に刻んだ点に焦点を絞りたい。彼によれば「人間には、The desire for recognition がある。この願望は、集団に於ける地位に対する人々の一般的斗争の中で示される。小女の服装、スポーツ、戦争、探険、戯曲、彫刻、自慢、弱い者いじめ、女のしおらしさ、伴病、けんそん、犠牲、殉教、聖人であること、以上は、その Pursuit (業務) それ自身の快樂に止まらない。公けの認識の快樂がある。公けの好意、名声。権力への意志、虚榮、野心」(タマス op. 138) この願望の概念からタマスの言葉を掴まえた。Whatever is, is possible を「既成事実、客観事実は存在する」と考え、ニュース蒐集に努力するのが新聞の機能であるが、タマスは嘗てスキヤンダルを新聞に書かれ、大学を去った。確かにスキヤンダルを起した彼は軽卒であるが、それを書きたてる新聞の無情、そして同僚の不信の眼を痛感したに違いない。彼は得た苦痛を思索への泉に切り替えねばならない。Whatever... を孔雀に彫り「俺にとって不可能なことはない」と考えるのは、彼の自負心である。「認識は、君が友情のない世界から、刺戟することのできる返答である」(タマス p. 141)。Whatever... は、彼に於てはその様に理解され If men define situations as real, they are real in consequence と、セットをなす言葉と思われる。彼はこのセットより「種々の状況の下に於ける行動の研究」をなした。彼が大学を去ってからの労作は、「不適応少女」The Unadjusted Girl 1923. であり「人々は、社会崩解の概念によって彼を同一視 identify する」(タマス p. 1) といわれる。

ところで此の章の最初に、ヴォルガの舟曳きを書いた

為に、途中で論旨を改めることが出来なかった。さて直ちに、本章の問題に進まねばならない。小稿は、放浪、犯罪などを行う者の社会意識を測定するに必要な方法論の作製である。それに当って先ず疑問になるのは、共に逸脱行動 (Deviant Behavior, 又は Anomie) なる概念の下に把握される放浪、犯罪、賭博、漁色、アル中、自殺などに於ける夫々の社会意識は異っているのではないかということである。例として、放浪と犯罪を比較しよう。

タマスによれば、放浪者の系列には、「放浪者、冒険家、金使いの荒い人、美術家、発明家、科学者が含まれる。彼らは、新経験に対する願望によって特長づけられる。」(タマス p. 142) と。彼の弟子フアリスもいう。「放浪者、移民、行商人、旅人、ホテル止宿人、美術家は社会の中で包まれることに対する一切の願望を失う傾向がある。永遠に新しい分野を求め、そして常に一時的な交際より以上のことを避ける。彼らは、stranger (見知らぬ人、他所者) であり、mobility (可動なる事、移り気なること) 及び emancipation (知識、道徳の拘束からの解放) を特色とする」(フアリス op. p. 64~66)。

さてタマスによれば放浪者は Bohemian personality であり、新経験への願望によって特長づけられる。では犯罪者はどうか。これは「女性に対する冒険家及び家庭生活への傾向をもつ者の如く、返答への願望」「見栄の強い人、及び創造的な芸術作品の様に、認識を喚起するために試みる」の二つには当てはまらない。故に、犯罪者は「欲張り、ビジネス企業の如く、安全に対する願望によって特長づけられる俗人 personality」(タマス, p. 143) に属するのであろう。この犯罪者の系列についてタマスは、放浪者のように、興味を持っていないと思われるので、主としてアドルノとマートンの本から考察しよう。

私は、犯罪者の社会意識を測定するに、アドルノが潜在的フアッシストの性格を測る尺度として構成した「反民主主義的人格測定尺度」の項目が参照されると思う。「因襲主義」並びに「権威に対する服従」これは、犯罪者に於ては、権威という「特殊な力の象徴化並びに、名声の獲得ないし維持」の「頂点にある人々と自らを同一視」(マートン, p. 133) する意味に於て。彼は「失敗することではなくて、目標を低めることが罪悪だ」(同右) と思う。彼は、自分の目標の邪魔をする人々に対し攻撃的である。それは「権威主義的な攻撃性」(Authoritarian aggression) である。何故なら犯罪は、権威(法律)の破壊であるが、犯罪の動機は、自己の権威の伸張である。次に「人間は、支配と服従、強者と弱者、指導者と

従属者という二分法ができるという先入観」である。これは、アドルノは、「権力と剛直さ」という。右はパースナリティ構造の不柔軟性 (rigidity) を示し、「支配か服従か、Yes か No か、これかそれか」という二分法が好きである。形式、理論、専制を愛し極端なナルシズムを伴った肛門的—サディスティックな性格である。この性格は、放浪者の如き、主観的、想像的な Tender-Minded とは対照的である。彼は、けちん坊 (miser) であり、「品物に対する欲求の満足」(マートン) という意味で虚栄心が強い。彼は恐怖 (fear) と小心 (timidity) の為に死を避ける。そこから「投射性 projectivity, 野蛮で危険なものが世界をうろついているという信念」が生れ、自己の「防衛 provide と安全」をはかる。そして自らが monster であることに「反内省」をもち、危険を省みず「破壊主義」をもつ。邪魔者は殺せである。

ところで放浪者と犯罪者の社会意識を分類しようとする小稿の意図は、次のタマスの見解を読むと甚だ混乱せざるを得ない。「捕獲、逃走、探検、放浪、カンニング、各種のコンテスト、スポーツ、仕事、夜盗、追はぎ、バクチ、酒、ゴシップ、恋愛、芝居、銀行破り、金剛石泥棒等各種の冒険パターンは新経験に対する願望で特長づけられる」(タマス p. 121) 「彼らは、死を誘うところの怒りを勇氣、前進、攻撃、仕事に於てそれ自身を表現する。新経験に対する願望は、故に、動作、変化、危険、不安定、社会的無責任を意味する。彼は、周知の規準や集団の利益を無視する傾向を示す。彼は、彼の不安定の故に失敗者となる。或いは、若し彼が彼の経験を社会的価値に換位する一例えば経験を詩型に置きかえる一なら成功者となる」(p. 125~6)。

この様な見解は、吾々が嘗て苦痛をもったか、或いは童心時代の pre-logic に立ち帰れば多少は判ると思われる。しかし吾々が論文を書くという心構えを固執する限り、右の見解は、放浪者と犯罪者を分類しようとする小稿の論理には、適当でない。ところで本章は、最初のリンゴの気持の問題、次にパースナリティの問題で、筆者には、難解であると悟り、次々に方向転換をせねばならない。しかしそれは、梗概に云った自分は何であるかの問題の方法上の手続であり、以下に述べる方法に達する為である。その方法へのつなぎとしてタマスが述べる放浪者と犯罪者の違いを引用しよう。

放浪者は、新経験の最大限を組織化社会の定型 (routine) 及び労働上の煩瑣 (irksomeness) を回避することによって確保する。放浪者に於て新経験に対する願望は、他の諸々の願望を支配する。そしてそれはどちらかといえば、願想的及び感覚的である。他方、犯罪者に於

て新経験に対する願望は、<sup>モーター</sup>発動機である。(p. 123)

註、ここにいう labor は、マルクスがいう労働の概念、  
ウエーバーがいう職業の概念を指すと思われる。  
motor は、目標へのモータ、<sup>モーター</sup>発電機であろう。

If men define…とタマスは書いた。それは、嘗て英文学の教授であり、又、ヴントの民族心理学や、フロイド理論等に影響された社会学者の言葉であった。彼はマートンがいう様に社会学に貴重な贈物を齎した。しかし、社会学を心理学の奴隷とした。嘗てデュルケムが社会学を哲学の奴隷から解放した様に、吾々は、心理学に対して闘う必要がある。何故ならソシオロジストは、行動を説明する為に、隣接科学を利用するが、隣接科学とは一線を劃するのである。社会学の独自性は何であるか、デュルケムを引用しよう。「比較社会学は、社会学そのものである」これは、社会学の「証明の処理に関する規準」の章に示され次の言葉とセットをなすものと考えられる。「人はその創定する諸比較の基礎に、同じ一つの原因には常に同じ一つの結果が対応する、という命題を採用しなければならぬであろう」(op. p. 276)「或る複雑性をもつ一つの社会的事実、あらゆる社会種を通してその全体的発達を跡づけるという条件に於てしか、人はそれを説明することができない」(p. 293)。「比較される諸社会をそれらの発達の同じ時期について考察するだけで足りる。かくて、一つの社会的現象が如何なる方向に進化するかを知る為には、人は、各社会種の青年期に於るこの現象と次に続く社会種の青年期に於るそれとを比較するであろう。そしてこの現象の示す強度が前者から後者に至って増大したか、減少したか、或は変化しなかったかに応じて、人々は、この現象が進歩している、後退している、或は同一状態にいる、と云うであろう」(p. 294)。

さて小稿は、社会意識の比較研究である。先ず比較に用いる規準が必要である。先ずホルネイ女史のいう「自己」(Self)を規準とする「自己拡大」(Self-expansive)と「諦め」(Resignation)がある。しかしこの自己なるものは、元来、哲学、心理学、文学に使用される事及びホルネイが、前者の例に、J. ソレル、後者の例にエリオットの小説ロモラのチトウ・メレマを引用し、共に「成功と特権」(Success and prestige)に向う(ホルネイ、p. 203, p. 286)というので、読者は、再び「自己とは何か」と考えねばならぬ。故にこの規準は捨てる。次にマートンの「文化目標」(Cultural goals)を規準とする。彼は、この規準を肯定する行動様式、「改変」(Innovation)と否定するそれ、「退却主義」(Retreatism)に

分類し、夫々に+と-の符号を与える。これは「自己」の如く人様々のものでない。貨幣の如く、使用価値と交換価値のあるものと考えられる。故に吾々は文化目標なる規準を貨幣と同一視すれば Balance sheet の如く、+を益(profit) -を損(loss)と考えられる。この考えに立てば規準に対する肯定(又は否定)の行動様式からその行動をなす者の社会意識を測定できる。この考え方は、ホルネイの Self-expansive solution : Appeal of mastery, Resignation : Appeal of Freedom にみられる、:を「何故ならば」と読む事(ホルネイ)でなく「それ故に」と読むこと(マートン)を示すものである。

さて文化目標に+又は-とは、それ自身何であるか、つまり文化とは何か、これに関してマートンの見解は、筆者にとり、具体性を欠くので文化を「精神的文化、物質的文化、行動的文化」の三つの範疇に大別するオグバーンの見解を採る。(W. F. Ogburn, Social Change P. 202~203)。この中、筆者に必要なのは「物質的文化」(Material Culture)―「家屋、工場、機械、製品、食糧、その他の物質的事物の総称」である。これは「文化は、本来、生物学的諸要求の充足から生ずる。文化は、…人間の要求を充足する為に成立したところの道具的実在である」(B. Malinowski, Culture in Encyclopaedia of Social Science vol. 4 p. 645)に適合すると思われる。さて自動車や食糧は、人間存在の構成要素抽出の方向と「型取り」(Patternning)である。吾々は、自動車を「甘いぶどう sweet grape であるにも拘らず酸いぶどう sour grape という狐」(マートン p. 145)の認識を持たず、甘くないという見解に対する理解力の極少を持っている。かかる文化は、「人心に予め承認された価値の存在」又は「人間の中に先住する pre-existing 価値の存在。我々が同化し効果あらしめ、確証し確認しうる―生活に役に立つもの」(W. James, Pragmatism 1908, p. 221 及び p. 201)である。故に吾々はこれに社会的関心と期待をもつ。即ち、物質的文化に対し、人々の共通の精神が露呈される。即ち、最初に、キリストや仏を持出すと話が混乱するが、自動車や食糧を持出すと、一定の客観的可能を意味する科学的方法によって分析できる法則性に近づき得る。

さて金、食糧、武器、奴隷、異性(歴史的には、女性である)等の文化を所有する者は、右を所有しない者に較べて、優勢の位置を占有することができる。そして所有が大であるに於て「必要の充足状態」(Die Notwendigkeit)に近づき、所有者は、満足と地位の安泰及び他者の信用を得る。即ち、他者の内的服従の態度を期待しうる。信用を得る者は、支配者となり、規範の施行者と

なる。即ち彼は他人の行為を左右する制度的に承認された権利をもつ。ところで文化は、甘いぶどうであった。これに志向 (orientation) する場合、規範を守らねばならない。何故なら規範を守らないと罰するという条件 (condition) ないし拘束 (restraint) が存在する。この拘束があるにも拘らず、甘いぶどうは依然として甘いので、人々はこれに近ずき、自らを拘束する。

さて吾々は、以上に述べた文化の概念を他の適当な概念で呼べないであろうか、ここにマートンを登場させねばならない。それは「文化は、構造をもつものである」(オグバーン)を更に論じて(マートン, p. 126. 146) 次の一文に至る。「彼は忙しく契約させられる。文化的評価 Cultural evaluation の暗黙の範例及び人と物の範疇化、及び尊敬すべき目標の構成に関する発見と行動に於て」(マートン p. 148)。但しこれもなお抽象的であるので、パースンズを引用しよう。「今迄述べた権威 authority の種類と degree は、諸個人の種々の評価 Valuation の最重要の基盤の明白な事柄である」(Parsons, Essays p. 76) 次に蔵内氏を引用する。「権威という言葉を…社会に於ける力の関係一般を意味するものとして用いる。力の関係に於ては人々の間に於ていづれか一の意志又は主張が肯定せられて、之に対抗する他の意志や主張が拒否されるが、かような関係として権威は、従って実は社会は、当然文化と深い関係を有しなくてはならない」(蔵内数太, 文化社会学, 昭 18, 133 頁)「権威は文化への基礎である」(137 頁)。このように権威、即ち文化と見なすのは、文化の規範的側面の抽出である。

さて、ルソーは、He was born free, and everywhere he is in chains と語った。この鎖は、「全体としての社会、の部分としての人間」に対する「諸々の所与の状況」any given situation, つまり「因果の無数の鎖」(an infinite chain of cause and effect) である。[by. V. Klein, The Feminine Character 1946. p. 143] この所与の鎖、拘束を「充分に個人が受け入れること」を権威志向 authority-orientation と考えて差支えないであろう。そしてここに吾々は「権威に対する質問項目」に賛成と反対の回答を求め、前者に高い点数 (high score), 後者に低い点数 (low score) を置いて夫々を権威主義と自由主義パースナリティに分類するアドルノの方向が想起される (p. 296, p. 327)。しかしアドルノの方法は、社会調査への結合を直接に意図して構成されたものであり、小稿それ自身が持つ理論への意図とは異なるのでここには触れない。

ここに吾々は、以下を述べる為に、以上を述べた事を知らされる。即ち、"Die Notwendigkeit wird nicht

dadurch zur Freiheit" (Hegel, Wissenschaft der Logik 1816. S. 281) Freedom is always freedom from something, and where freedom is not conceived as the opposite of restraint, it is meaningless. (Simmel, from The Role of the individual in history 1946. by Plekhanov)

Core of freedom, absolute absence of all restraint, (Malinowski p. 54)

以上、Notwendigkeit-restraint, に注意しなくてはならない。

比較社会学は社会学そのものである。しかし、比較をして研究することは、研究者が比較する対象のいづれにも味方しないことである。その際比較の対象が行動即ち意識であり、研究者も意識をもつ故に、難解である。即ち比較研究は「あれか、これかと迷うこと。懐疑」から出発するが対象が意識である限り、研究者自身が「あれか、これかのどちらにも属さぬ状態、倒懸の苦」に位する。ここに比較研究は、非行、犯罪、自殺、精神異常などに関する適当な方法となる。何故なら、デユルケムはいう、「健康の特徴である中庸の満足に於いて個人の社会的均衡の危機。社会的尺度に於る昇降ないし傾斜、——自殺は生れない」(デユルケム p. 271)。即ち本章の始めに述べた様な中庸の人は「社会の部分としての彼」という点で「一元論的」(monistic)「樂觀論的」(optimistic) であり、「私と君」を認識する点で調停的である。彼は時に Das Soziale から離れることがあっても、常に Das Soziale に帰還を期待する。これに反して「あれかこれか」と考える者は、最初に社会と彼の間で断層をもつ、そこで社会と彼を対立的に考える。そして「自分の Bild に似せて創った社会」は、当然社会人としての彼と個人としての彼とに分裂した内面的な社会である。彼にとり「性格を構成する技術 trait としての文化」(Faris, p. 55) の合理性(原理によるもの)よりも、経験(事実によるもの)の方が大切である。しかし経験は、個人の特異な感覚に依る事が多いからこれに基く考えは、社会的な見解と相容れない場合が見出される。彼は宗教のもつ連帯感情を持たない。「死よ汝の刺は、何処にありや。」「キリスト我が内にありて生きる」というアト・ホームな気持を持ってない。ジンメル<sup>1)</sup>の表現をもってすれば彼は「家へ向ってこの道を進んでいる」のではなく、「家を出てこの道を進んでいる」(ジンメル断想 80) のである。彼は、ユリシーズの様に帰還するのではなく、ゴーガン<sup>2)</sup>の様に「自ら独立した死所として設計した隔離室、タヒチ」(小林秀雄, ゴッホの手紙, p. 115) が必要なのである。

さて本章に於て吾々は、種々の方法論に接近し、常にそれを途中で放棄した。理由は、敵陣突破の適当な方法論がなかったからである。しかしここでいよいよ方法論を作製し、本論にバトンを渡さねばならない。それでここで体勢を整えねばならない。

筆者は、ここで次の様な作図を作っている。ゴーガンの「仕事の動機には、人間への不信が隠されている」(小林 p. 136)といわれる。だがゴーガンにとってその様な批評の無視や「家族から離れること及び金銭のわずらわしさから離れること」(針生一郎ゴーガン p. 7)の方が大切であった。ヒューマニステイックな批評も、近眼的に模写することも、もう沢山だ。人々が彼を非難するとき、彼は、それに答えず「はだしで歩き、腰巻をまとい、土人の女をめとった」(針生、同)。彼の心は、南に飛んでいたし、「船は、モレアをめくり、タヒチはわが前にあり」であった。最早、その際敵陣突破などという、いきまく心を彼は持たないのである。

ところで35才まで株式取引所の職員として市民であった彼が右の様な「ひねくれた自由意志」(perverse free will)を持つに至るには「変遷感情」(a transitional response)がある。a long dynamic process or historical evolution がある。ホルネイによれば、ゴーガンの船出は「ノイローゼ解決の一切の解決のうち、最も根本的な方法 a way the most radical である。」(ホルネイ, p. 259)。

彼は、画家になる為に取り引所を辞めた。それは、絵に自信があり、絵が売れると思ったからである。しかし「主観的企図 Subjective disposition と客観的結果 Objective consequence との一致 coincide」が破れ (it may not), この二つは、無関係に変化する。(vary independently) [マートン p. 26] ここにゴーガンは、欲求不満、即ち夢をもつ。彼は既に取引所の地位と家庭を失った。絵は売れなかった。「存在の絆 trammels of existence」(マリノフスキー p. 54) が無くなった。「充分性、原理、力、経済」(同) がなくなった。妻は、彼を許さなかった。故に「意識の分裂 cleavage」(Elliott, Social Disorganization 1950. p. 457. After divorce の項) がくる、「あれかこれか」(L. Dublin, To be or not to be 1933) がくる。しかし貧困と妻の憎悪に対し「ルサンチマンの複合感情を行動的に表現するには、無力な存在である感情」(マートン p. 145) がフランスを嫌にさせ、未知の世界への脱出へと駆立てる。

ところで吾々の社会に於て「得た地位」(achieved status) は「競争や個人的努力を通じて占められるよう個人に開かれている」(R. Linton, The Study of Man

1936. p. 114)。この地位の獲得ないし固守の為に、吾々は自らの saling point を示す必要がある。「自己の欲求を示す為に、自らを他と区別すること to differentiate」(Aptiker, Dynamics of case work and counselling, の Counter-will の項) が大切である。その際、吾々は自分が商品であることを忘れてはならない。即ち商品の型に於いてしか自分の欲求を主張できない。売れない商品はナンセンスである。顧客が何を欲しているか。彼らの思っている事に適合せねばならぬ。商品は静穏 (Serenity) にして、「彼の唯一の道徳は、スマートであること」(ホルネイ p. 287)。どの客にも適合できる様に、寛容 (tolerance) と「空っぽの心」(broad-mindedness) を特色とする。売れる為には、常に Outlooker として人々の興味を考えねばならぬ。Outlookerの方がよく判るのである。そして大臣の就任の様に「私は、その任でないのだが、皆さんが云われるので」と振舞う事が大切である。或いは「悩みを持つ者」(Client) に対する社会事業家 (Case worker) の態度を学ぶべきである。Client が Case worker に相談に行くのは、後者が前者の利害に社会的に最も遠いところにあり、故に心理的に安心するからである。この様に自らを商品とする、「他人志向の性格」(other-directed character) によって、実質的に優勢の地位を占有する「最もずるい」(most astute) やり方が現代人の生き方である。即ちタマスの If men 云々を受身の型で理解するのである。船は沈むまでは安全であり、餓になるまでは、仕事があるという人生哲学である。これは人生の究極に対して目標を持たず、唯、日々を楽しく暮そうと云うことである。それは、積極的な生活の肯定である故に、最初に神や色々の思想を基盤に持たずに、生きることである。この考えは、ジンメルの「潜在的放浪者」にみられる。Das Man の世界から逃げず、「今日やって来て明日滞在する人として」(der heute kommt und morgen geht, sondern als der, der heute kommt und morgen bleibt S.685) 生活する。これは、ジンメルの如く、社会学者、ユダヤ人の考え方であり、又、チャップリンの考えである。カーテイナーは、The psychological Frontiers of Society 1945 (p. 369~372) でいう、「チャップリンは、Mr. Nobody である。…ミッキーマウスは、チャップリンの武勇伝の続篇である」彼は、アメリカから追放されたが、イギリスやスイスから追放されはしない。第一彼は、其処から逃げようとは思っていない。

さてチャップリンはドルからポンドやマルクの国へ逃げたって、唯、金の名称と、それに附随する若干の慣習が変ったに過ぎない。ところで「ヨーロッパでの金銭の

争いから離れることがゴーガンであった。これは金を規準として、+と-の次元の違いである。彼は、顕在的な放浪者であった。ゴッホのいう様に、「想像力で我を忘れ、実際は、無責任な男」(小林, 133頁)「求める心の激しい余りに、その目的を達することは、却って彼らの拠って立つ肝心の世界を、その根底から覆してしまうような結果になる、そういった人間」(モーム, 中野訳, 月と六ペンス, 203頁)であった。

ゴーガンの伝記を読むとき、「感動—感情の意識的発動—昇華—価値合理的」というウェーバーが示す芸術家の気魄に圧倒される。ヨーロッパに対する「無力な敵意の経続的再経験」(マートン p. 145)がある。彼は、ヨーロッパ人に対する不信と絶望を反復した。しかし野蛮人の前にはひざまずいた。[参照, 美しい大地, 大原コレクション, 我れマリアに礼す]彼にとって人間は、型や理性に入らぬ不可解なもの、驚異に満ちたものであった。彼は、自殺をはかったが、太宰治の様に「不幸も幸福もない。山に向って眼を上ぐ」(人間失格, 桜桃)等という諦めのいい態度ではなかった。「私たちは何処から来たか? 私達は何なのか? 私達は何処へ行くのか?」という疑問を投げ、その作品を描いて後、毒薬を仰ぐ人であった。所謂、ダイゼスト式に物判りのよさに比較して彼は愚かな人間ということができよう。

さて「反逆」(Rebellion)を所与の環境、「社会構造の内の within」(マートン p. 379)の価値と(外側にある)新しい価値の二者選一(alternative)に於て後者を選び、個人の価値、努力、報賞の間に不均衡を招来せしめる社会構造を変革によって右の不均衡を設定し直すこととすれば、ファシズム、犯罪、J. ソレル、ゴーガン等の行動は、凡て反逆なる概念の下に把握されるであろう。但し、具体的には、反逆の型態を異にするので若干の分析を試みたい。

ファシズムの分析に於て、既述ヘーゲルの Notwendigkeit と Freiheit マリノフスキーの Restraint と Freedom の概念が必要である。これは、具体的に云うと、権威 100%は、自由 0%、(及びその逆)である。ここに嘗て課長(権威 100%)であった者が係長になれば、権威 60%、自由 40%、賊になれば権威 0%、自由 100%といえる。これは、筆者が単に数学的に考えたのであるが、フロムの *Escape from Freedom* 1941 の *Freedom is fear* (p. viii) 及び *If a man cannot stand freedom he will probably turn Fascist* (ブックカバー)の言葉は、右の数学的理論化に過ぎない。又、「彼は援助、保護、並びに愛に包まれることを切望する」(ホルネイ, p. 215)「彼は帰還を期待する」(229)とい

う考えは、小説と映画“Not as a stranger”(原作 M. Thompson 1956)の主人公である。彼らに於ける反逆の帰結は、反逆したものへの帰還である。

次にJ. ソレルのケースである。彼のナポレオンになれないという絶望と上流社会への憎しみの濃縮は、意識の再編成過程に於て、彼の属する下層階級及び彼が一時属した中産階級(レナル家の家庭教師)に対する裏切り者(the renegade)である事によって上流社会接近へと変化する。彼にとって最初の憎しみは、甘いぶどうが手に入らない事であり、ぶどうに対する価値を疑ったのではない。この型は、アドルノによれば、潜在的に最も危険なタイプ」(p. 767)であり、フロムに於けるファシストをドイツ中産階級に属する愚かなる大衆とすれば、これは、指導者としてのファシストである。彼は、凡てを「扱い、操作しうる対象として」(アドルノ同右)、眺める。システムの統制、操縦をなす舵である。

次は或る種の犯罪者である。例を示そう、「刑務所生活、三十年、久し振りにシャバに出て来たが、…も一度刑務所入りを志願してお茶屋で芸妓をあげた男、…大阪生まれ住所不定、無職、K. M. (73)…」(京都新聞, 洛中洛外, 32, 7, 17)このケースは、ファリスによって説明されている。彼らは、人里離れた場所を好み、或るケースでは、釈放の時期を怖れたり、牢獄への帰還を試みる」(Faris. op. p. 55)。これは、橋の下に住む人にも見られる。牢獄を橋の下に置き換えればいいのである。この型や、デカダン<sup>フツェュード</sup>をホルネイは、底浅き生活 *Shallow Living* (p. 286)と呼ぶ。この種の反逆をマートンの行動パターンの如く、用語を使用すれば、ゼロ主義(Naughtism)といえるであろう。この言葉は、筆者が仮りに名付けたものであるが、云う事は、要するに、社会人の立場からは判らない行動を指す。この行動は、怠惰 *Idleness* であり、ビヴァリッジによれば「5巨人(貧困、病氣、無知、不潔、怠惰)のうち、貧困が一番攻撃し易い」(Beveridge, *Social Insurance and Allied Survi-ces* 1942. 序)又、社会人の意識を「ターゲットとすれば」これは「退屈」であり「坐様軸を異にする」ということである。(近松良之, 倦怠運命愛 昭 30 p. 1 p. 9), この見解は、筆者に判らなかつたが、既述ジンメル<sup>ジンメル</sup>の言葉で明らかになるであろう。「自由は、拘束の反対 *opposite* として考えること」これは自由を拘束(権威)と次元を異にするという立場である。即ち、マリノフスキーのいう「自由は拘束の完全な欠除」に於て、即ち「権威 100% = 自由 0%、自由 100% = 権威 0%」の図式に於て、「権威が 51% 消失し、権威 49%、自由 51% の状態からは、権威の引力は失われ自由の引力が来る」という

仮説である。この仮説は、拘束の完全な欠除即ち、孤独の研究をした研究者の報告が実証する。Lundell は「熱帯林に於ける孤独」なる論文に於て、次の報告をした。(1)強度のそして不快な孤独、(2)望郷、(3)帰国後、人々を避け、沈黙し、ジャングルの孤独に憧れる。(4)或る種の怠惰になる。以上で体験は終り、(5)に、より以上の孤独は、知性と心理的崩解を招くであろうと結んでいる。

(Frsis, op. p. 55) これは、一青年が味った一年間の意識の変遷過程の記録である。即ち自由を恐怖とする立場から、自由は懐しいという立場への変化である。ランデルのいたジャングルには、ワニと the rising palm (ヤシガニか?) しかいなかったが、彼は彼らに友人以上の親しさを感じた。彼の気持は、ゴーガンに於て次の様に語られている。「いつかその日がきたら、私は、太平洋の孤島の森の中に入って、そこに自分を埋めたい。…そこタヒチでは、気持のいい熱帯の夜のしじまに、心臓の鼓動のつぶやく様な音楽が、まわりの神秘的な存在たちと愛らしい諧調をかなでるのをきくこともできるだろう。やがて、金のわずらいもなく愛し、歌い、そして死ぬことができるだろう。」(針生, p. 7) ランデルやゴーガンの心境は、都会人にとって、ファンタジーを与える。シャガールの絵やターザンの映画や、ワイルドの童話的小説、「漁夫と人魚」に於ける夢の様に。

さて、吾々は、自由に憧れる場合がある。「疲れた時、近くの山を一人で歩け、二人で行ったら歩調を合せねばならず疲れる。時計を持たず一人で飛んだり跳ねたりせよ。それが自由というものだ」とスチーヴンソンは、随筆で語っている。しかしこの自由は、下山して家や職場の権威に戻らねばならない。又、「自由が欲しい」という家出娘も、都会で、新しい権威(金や不良)に属する。「自由が欲しい。それは私自身に対する義務です」とノラのいう自由は「個人的選取、自律性」(マリノフスキー p. 170) があるが、仮りに彼女が修道院に入ったりすれば又、その権威に属する。

では、自由をいつまでも持続するのは誰か、即ち本当の自由人(The Genuine Liberal)は誰か。アドルノによれば、フロイドのいう Libidinal types (erotic type) である。(p. 781)。それは、老人になっても恋愛をしたり、結婚をしたり、ダンスホールに行く若さを持つ人である。これは恋愛が目的なのでなく一つの手段であることを指す。「黒い可愛い眼は、家をくづれさせ、街を倒れさせ、私の心の中のこの漆喰の壁さえも」(ゲーテ、シチリヤ人の歌) 打ち破るからである。問題は、ゲーテ、チャップリン(モダンタイムズの) ゴーガンの自然人の様な娘に彼らが郷愁を持つのは、彼らの裡の分裂し廃頽

した「文明を浴びた老人」(ゴーガン前川訳、ノア・ノア 39頁) を滅し、永遠に新しい「純な力強い人間、野蛮人に蘇えらす」(同) 手段なる故である。何故なら感覚文化」(ソローキン)、「母性文化」(シエラー) は、その様な性質もっている。恋愛によって胸が高鳴ることは、理性を打破し、自由の状態「法律からの自由、勝手気侷、無政府」(マリノフスキー, p. 54) に達する道である。そしてマリノフスキーによれば「文化の基盤は権威でなく、自由である」(第二章、第四章等)。「この人は「ドイツ国家社会主義の公然たる反対者」「南洋の島へ行った社会学者」である。」さて個人的創意を貫徹するためには、創造的逸脱が必要である。これは、既述タマスの放浪者に見られ、又「社会学的方法の規準」(p. 169) に於てデュルケムの犯罪者に見られる。芸術家や社会学者が彼らに憧れるのは、前者が元来は、放浪者でも犯罪者でもないからである。人は自分に欠けたものに憧れる。タフ・ガイや文明によって型どられぬ人や夢を持つ人に憧れる。右を持つ人はゴーガンに於て土人、チャップリンに於てルンペン、太宰(斜陽)に於て「雑草の如き庶民」であった。問題は、ゴーガンのようにそれに倣するか、太宰の様に途中で諦めるかの違いである。

さてゴーガンは船に乗る以前に、タヒチの図式を作っていた。しかしタヒチに行く事は、その図式の実証化であった。これは、勇気を要することである。又、夢の烈しさとフランスへの絶望を示す。「夜蔭に乗ずる盗賊の様に、重要な官職から突如としてイタリアへ失踪」(クレッチェマー 135頁) のゲーテも、大学からスラムへ行くタマスも、偉大という他はない。「If men…とタマスは書いた。」「彼が愛した言葉 whatever…私はこれを社会的感覚で受けとる」とはマーソンの第七章に於ける最初と終りの文章である。この章は「自己実現の予言」なる章である。私は、タマスが孔雀に彫った Whatever の孔雀に焦点を置いたが、この孔雀は虚栄でなく、アフリカのジャングルに住む自由な鳥と考えた方がよいのかも知れない。この鳥を漫画にすればフランスの漫画映画、「やぶにらみの暴君」に於て暴君に対し、がさつな高笑をする鳥、即ちゴート民族の精神に通ずるのであろう。そしてこの鳥は、デュルケムに於て「社会は圧迫力として個人に現れ、…社会の真実の機能は理想を創造するにある」として語られ、「犯罪は特別なエネルギーと集合感情を要し…ソクラテスから犯罪人に至る犯罪」が「平常的現象」である事を認めないと「科学そのものが不可能となる」(第三章、三)と語られる。マーソンの於ては、タマス及び著名なユダヤ人達「マルクス、フロイド、アインシュタイン等)の考えが権威を破壊し Enacted In-



stitutional change を齎すという。それをなし得るのが、困難な自己に打ち克てる希望と笑いの言葉 *Whatever* 云々であろう。

## 附録 異邦人について

“The Sociology of Georg Simmel” Tr. by  
K. H. Wolf 1950<sup>1)</sup>

The Stranger 及び

“Soziologie” by G. Simmel 1908<sup>2)</sup>  
Exkur über den Fremden の全訳 (山本和生訳)

Simmel の著作中で最大の留作 “Soziologie” 中に本論と別に彼は余論を各所に書いているがその一つの項はこの異邦人 (Fremde) に関する章がある。ここに全訳したのはその章である。非常に難解なもので K. H. Wolf の英訳版を存分に活用した。この種の翻訳は初めてであるので至らない箇所が多くあるが、おしかりを受けて機会を改めて改訳したいと思う。

### 異邦人に関する余論

もし放浪することが与えられたあらゆる地点からの解放であるならば、それはそのような地点に定着することの対立概念であるが、社会学的形態としての異邦人 (Fremden) はこれらの二つの特質 (解放と定着) の共有を示している。この現象は一面においてどれほど空間的関係の単なる状況であることを示しているも、他面においては人間関係の象徴であることを表わしている。異邦人はここでは今日やって来て明日出かけていく放浪者 (Wandernde) として過去に度々問題とされて研究された意味に於いてでなく、寧ろ今日やって来て明日滞在する人として論議される。彼はどんどん移動して行くこともないが、かといって行ったり来たりする自由に全く打ち勝ってしまったのでもない。彼は云わば潜在的放浪者 (Potenziell Wandernde) である。彼はある特殊な空間的集団か、或は空間的限界に類似した限界を有する集団の中に固定している。しかしこの集団に於ける彼の地位は本質的に最初からこの集団に所属していなかったという事実、或は集団それ自体からは生じ得ない性質を彼が集団に持ちこんだという事実によって決定される。全ての人間関係に含まれている近接と遠隔の統一 (Die Einheit von Nähe und Entferntheit) は異邦人の現象に於いては有機化されている。異邦人との関係におけるへだたり (Distanz) というのは直ぐ近くにいる彼が遠いことを意味し、奇異 (Fremdsein) は彼はやはり遠いの

だが実際には近くにいることを意味するという説明で、極く簡単に形式的にできる仕方で有機化されている。何故なら異邦人であることは元来独断的絶対的關係であり、それは相互作用の特殊な形態であるからである。シリウス (天狼星) の住人達は、少くとも社会学的に適切な意味においては、実際に異邦人でない。彼等は、遠いとか近いとかの範囲を越えてとどこかぬ所に居る。だからシリウスの住人達は、我々にとっては結局のところ実在しない。一見乞食や諸々の危害を与えるもの (inneren Feinde) のような異邦人は集団それ自体の一分子である。十分に成熟した成員としての彼の地位は、集団の外側にいることと、集団を物ともせずに進んで行くことの両方を含有している。以下の論は完全さを意図しているのでは決してないが、異邦人との関係において、調整の型と調和した相互作用を見出す為に、どんな要素がへだたりと抵抗を増大せしめるかを簡単に述べている。

経済史を通じて異邦人はいつも商人 (Händler) として、或は異邦人のごとき商人として現われている。経済が本質的に自己満足であり、生産物が空間的に狭い集団内で交換されている限りは、集団は仲買人を必要としない。そして商人は集団の外部で独創された生産物を求めるためにだけ必要とされる。集団の成員である限りにおいては必要物を買うために仲間 (circle) を離れない。——このケースにおいては彼等はその商域範囲の外部では異邦の商人 (Fremden Kaufleute) であるが——。萬人が生計を立てる機会がつかめなくなって以来、仲間から離れざるを得なかった商人は、異邦人とならざるを得ない。異邦人として自分の活動場所を離れるかわりに、彼がこの場所に身を固めてしまうと、彼の地位は益々はっきりと極立ってくる、数え切れないケースで理解できるように、彼が仲買的な商業に依ってのみ生活できるという条件だけで、上記の事は可能である。以前、経済が幾分封鎖され、土地が分割され、手工業者の要求を満足させることが維持された時、商人は自分達の実存を自覚する。何故なら商業だけが無制限の連合を可能にさせ、商人の知恵は常に幅広くなり、新しい商域を探し出し、それが可動性を少くして除々に増大する取引圏への依存だけで、独創的な生産者を手に入れるという非常に難しい事業を巧くやり遂げる。商業はいつも原始的生産よりも多くの人々を吸収する。以上のことから商業は、云わば定員外に余分なものとして、経済的地位が実際なくなっている集団へ侵入した異邦人を生み出す社会上の地位である。この古典的な例がヨーロッパのユダヤ人の歴史であろう。異邦人は元来、土地の所有者でない。土地は物質的な意味だけでなく、固有の生活の支柱としての比論的

な意味からも土地を所有していない。空間に於ける地点としてでなく、社会的環境の観念的地点に於いてさえ、土地を持っていない。非常に親密な関係において、彼は種々の魅力と重要さを展開し得るが、彼が他人の目に異邦人と写る限りは、彼は土地の所有者でない。仲介的商業の制限や、まるでその代償されたもののような純粋な財産に対する、度々の制限が可動性 (*Beweglichkeit*) という性格を彼に与える。可動性が閉鎖した集団に生ずれば、それは異邦人の形式面を構成する近接とへだたりの統一を具体化する。何故なら根本的に移動性を有する人は、絶えずあらゆる個人と接触する (*contract with*) といえ、親戚とか地域とか職業とかの連合を確立しては、唯一人の人とも有機的に関係させられない (*be not connected with*)。

この星座 (きら星のように目立った人の一群) についてもう一つの表現は、異邦人の客観性ということである。彼は全く集団固有の要素や集団特有の傾向を委託されていない。それ故、客観性 (*Objectiven*) という特異な態度で集団の成員に接近する。しかし客観性は単なる間隔と超越を意味しているのではない。客観性には、へだたりと接近、無関与と巻き込まれることの両者から成る特殊な構造がある。私は集団における異邦人の支配的地位について “*Über-und Unterordnung*” の章で言及した<sup>3)</sup>。その最も典型的な実例は、家族及びパーティの利益に巻き添えを喰うことから自由であるという土地の人は絶対にないという理由で、土地の人に集団の外部から自分達の判事と称されたイタリヤ都市の事実である。異邦人の客観性は完全でないが前に示したどどん動く異邦人についても関連がある<sup>4)</sup>。異邦人が著しく驚くほどの素直な公開を受けるといえるのは事実である。これは時としては告白的性格をもった打明話であり、大へん親しく関係した人に対して当然注意深く隠される類の秘密をもらされることがある。客観性は主観的、客観的相互作用の全く外部にある無関与 (*Nicht-Teilnahme*) でなくて、それは関与の特殊な類である。それは丁度理論的観察の客観性は物が物の性質を描写するのに受身の白紙 (*tubula vasa*) として意志を云々するのではなく、反対に物自身の法則に従って作用する十分な活動に言及するのと同じであり、それに依って個人的主観的差異が、同じ客体に異った絵 (*Bilder*) を生じめるような、偶然の転置や強調 (*Verschiebungen und Akzentuierungen*) を排除する。客観性は亦自由としてはっきり定義され得る。客観的個人は与えられた彼の知覚や理解や評価を偏見することができる社会的規範や秩序の委託によって拘束されない、どれほど自由が彼の親密な関係さえも、丁度鳥

瞰図のように概観して論ずることや、体験して知ることを許そうとも、自由は多くの危険の可能性をはらんでいる。あらゆる種類の暴動において、おそわれたパーティは事の最初から間蝶や煽動者が外部から挑発して来たことを主張している。このことが事実である限り、異邦人の特異な役割の過大視がある。彼は実際的にも理論的にも自由人である。ほんの少しの偏見しか持たずに事態を見渡す。事態に対する彼の基準は最も一般的、普遍的客観的認識である。彼は慣習や敬虔や従来慣例によって行動を縛られない。

最後に客観性という性格を異邦人に与える近接と遠隔との釣合は人と彼との関係の抽象的実在 (*abstraktern Wesen*) の中にある実際の意味を見出す。このことは異邦人と一緒に人は共通に単なる最も一般的性質 (*nur gewisse allgemeine Qualitäten*) をもっているにもかかわらず、実際には非常に有機的に関係のある人との関係は、単に共同の姿 (*Gemeinsamkeiten*) とは特別異った共通性に基ずいている。実際全ての幾分個別な関係は種々の変った型でこの体系に基ずいている。それら個別な関係はある共同の姿が個人間に存在する状況によってのみ決定されずに、関係に影響し、かつ関係の外部に残っている個別的差異によって決定される。何故なら共同の姿そのものはその関係に及ぼす共同の姿の効果として、共同の姿がこの特殊な関係の関心の間にだけ存在するかどうかという疑問によって根本的に決定される。かくして共同の姿はこの関係に関しては全く一般の姿であり、この関係のあらゆるものに関しては特異なもので比較できないものである。さもなくば関心は共同の姿が集団や類型や血縁に一般的に共通であるという理由でこの姿は共同の姿に共通すると感ずるか。第二の従属的な二者選一のケースにおいて、共同の姿の効果はこの意味において、親密な成員を含んだ集団の大きさに比例して弱くなる。それらの統一されている基礎として平凡さは作用するけれども、それは互に独立したこれら特殊な人を生じせしめない。何故なら平凡さは、彼の集団の成員よりも先に種々の個人的な他人であると共に特殊な全ての人とも関係することができる。これはまた明らかに同時に関係が近接とへだたりを含んでいる仕方である。共同の姿が一般的事であることの拡張を目的とし、共同の姿の基礎となる瞬間性に、それは人間関係の力が特異な求心的な性格を失ってしまった。この関係に対する偶然性の感情と冷静の要素とを附加する。異邦人の関係において、このきら星のような人の一群は、特別な関係を排除した個人的要素以上の基本的優越さと法外さをもってのように私には思われる。我々が民族的社会的職業的

或は人間的存在として共同の姿を我々と彼との間に感ずる限り、異邦人は我々と親しい。そして共同の姿が我々或は彼を超越して拡がっていると我々が感じ、又共同の姿は非常に多数の人々をつなぐという理由だけで我々を人と関係づける限りにおいては、彼は我々から遠くはなれている。この意味において奇異への第一歩は最も親密な関係においてさえも簡単に入り込める。初恋の段階では愛慾の関係がそれを一般化するあらゆる考えを強く拒絶する。恋人達は自分達の愛はどこにもなかったと考えるし、愛される人も、愛される人に対する感情も、比較できるものは何もないと思う。仲たがい——原因としてか結果としてかは区別することは難しいが——は通常この独特な感情が関係から消え去ってしまった瞬間にやってくる。その価値に対する多少の懐疑は、恋自身と二人の為に、彼等の関係において結局のところ二人は一般的に人間の運命を遂行したという真理に襲われる。恋人達は以前に数千回もなされてきた経験を体験し、もし彼等が偶然に特別なパートナーに合わなかったら他のパートナーと同じ意義を見出したであろう経験だけを体験したという冷いがほんとうの考えに襲われる。この感情のもつ若干の真理はどれほど親密でも、あらゆる関係にほとんど欠いていない。何故なら二人に共通なものは彼等にだけ共通でない。この真理はその上に、平凡さの多くの可能性 (Möglichkeit) を含んでいる一般的観念のもとに包摂されている。これらの可能性が現実になることが少なかつても、我々は間においてそれを忘れるだろう。にもかかわらず平凡さの可能性は影のように或はあらゆる言葉で記述するのを逃れる霧のように、我々の間でそれ自身 (平凡さの可能性) を信じている。しかし霧はそれが嫉妬と呼ばれ得る先に固形の形態に凝固してしまう。あるケースにおいて多分もっと一般的で少くとももっと打ち勝ち難い奇異は異った理解し難い事柄が原因ではない。奇異は寧ろ親密、調和、接近が実際にこの特別な関係独特の性質でないという感情によってそれらは附随せられているという事実の原因している。親密、調和、接近、はより一般的なものであり、パートナーや漠然たる多数の他人との間を潜在的に説き伏せるものであり、それ故単に外面的排他的必然を実感させる関係を与える。

他方パーティを快よく包含するもっと一般的なものに基礎づけられた真の平凡さを拒絶する奇異 “Fremdheit” の類がある。未開人に対するギリシャ人の関係は多分この典型であろう。奇異が真に一般的属性であるというあらゆるケースにおいて、特に純粹に人間であると感じれば他人を決して承認しないというのがギリシャ人の関係である。異邦人はここでは肯定的な意義をもって

いない。彼に対する関係は無視された関係である。彼はここでは関係されたものではなく、集団自身の成員である。一つの集団の成員として寧ろ彼は通常人間的平凡さに基礎づけられた関係として特徴づけられているので彼は同時に近くて遠いのである。しかし単に一般的であることが普通である意識が、普通でない意識を圧する時、接近とへだたりの間に特異な傾向を生じせしめる。国家、都市、民族等の異邦人のケースにおいて、この普通でない要素が、個人的でないものであろうとも、単なる起源の奇異は多数の異邦人に共通である。この理由から異邦人は実際に個人として理解されず (云い表わされず) 特殊なタイプの異邦人として言い表わされへだたりの要素の方が接近の要素よりも異邦人に対してはほんの少しだけ一般的なものである。この型態は特別のケースの基礎であり、事例としてはフランクフルトや各都市にいるユダヤ人に課せられた税金をみればよい。クリスチアンの市民に支払われる税 (Beede) は財産の変遷に応じて改められたが、全ての一人のユダヤ人に対しては、財産の時代に応じての移り変りを調べずに一度限りで断然きっぱりと固定されていた。この固定性に依ってユダヤ人は客観的な競争の個人的存在者としてでなく Jew として彼の社会的地位を得たという事実に残っている。全ての市民はそれ相当の財産の所有者であり、彼の税金はその財産の動搖に従っている。しかし税金支払者のユダヤ人はまずはじめにユダヤ人であり、彼の税金の状態は変化しない要素もっている。以前これらの個人的な性格描写が省略させられ同一の地位がもっとも強く現われ、全ての異邦人は全く等しい人頭税をはらう。異邦人は集団に非有機的に附加されるにかかわらず、まだ集団の有機的な成員である。その均一化された人生はこの要素の特異な状態である。この地位が近接とへだたりの統一を含んでいるという説明の他に我々はこの地位の特殊なものを説明する術を知らない。相当数の異邦人は全ての関係の特徴づけるけれども特別な割り前 (偏見による税など) と相反する緊張は特異な形式的な “異邦人” を生み出すだけだ。

註

- 1) 同書 402p.~408p. The Stranger.
- 2) 同書 685p.~691p. Exkur über den Fremden
- 3) Soziologie of Georg Simmel 216p.~221p. を参註されたい。
- 4) Soziologie (X) “Der Raum und die räumlichen Ordunger Gesellschaft” でこの本文と同じ章にのせられている。